九州産業大学国際文化学部紀要　第16号　59－92（2000）

現代アイルランド劇作家研究(2)：マーティン・マクドナ

河　野　賢　司

アイルランド辺境出身の憎むべき司祭は言った。「マリアに誓って。銀貨が手にはいるなら良心などはどうでもいいのだ。それより，上等なビール一杯のほうがずっと有り難い。」(ラングランド『農夫ピアースの夢』第20章)[1]

I　はじめに――著者略歴

著者のマーティン・マクドナ[2]（Martin McDonagh）については，実は年齢も定かでない。最近刊行された演劇事典[3]では1968年生まれと記載されているが，別の研究書[4]は1971年と明示し，3年の開きがある。さらに，文学座公演プログラムでの訳者の鴇澤麻由子氏の解説によれば「1996年，26歳で彗星のごとく英国演劇界に現れた[5]」そうだから1970年ないし1969年生まれと推測され，筆者がネット検索で得た1999年3月5日の劇評[6]の「まだ28歳」，同年4月劇評[7]の「まだ30歳前」は，1970年ないし1971年説を支持する。いずれにしても，現在30歳そこそこの新人であることだけは確かなようで，それでいて英米の表舞台ですでに4作品が上演され，数々の賞を受賞している気鋭の劇作家である。

マーティンの両親はアイルランド西部（母親はスライゴウ，父親はゴールウェイのコネマラ地方）の出身で，ロンドンへ移住後，それぞれメイド，建設作業の肉体労働に従事するブルー・カラーだった。一家はアイルランド系住民が半数を占めるテムズ川南岸の「象と城」（Elephant and Castle）地区（この奇妙な表現は俗語で「尻の穴」や「地獄」をも意味する），のちに同様のアイリッシュ地区キャンバーウェル（Camberwell）――現在はサザーク（Southwark）区――に居住し，夏休みともなると，実家のあるスライゴウ州イースキー（Easkey）やコネマラ地方で過ごしたという。ロンドンでのマーティンはカトリック教区教会の少年聖歌隊に加わり，アイルランドの愛国的な物語にも夢中になって少年時代を過ごしたが，16歳で学校を中退し，失業保険を糧に好きな読書やテレビ，映画三昧の日々を送り，BBCに22本ものラジオ・ドラマ脚本を応募したものの，ことごとく不採用で返却された。それでも彼は劇作の夢を諦めず，今度

は舞台劇執筆に転向し，これまでに7本を完成させたという。両親は近年，コネマラ南沖合のレターマラン（Lettermullan）島に引退して戻ったが，マーティンは，やはり作家の兄とともにロンドンに残り，夏場はアイルランドへ里帰りする二重生活を送っている。この＜ロンドン在住のアイルランド人＞，あるいは＜アイルランド系イギリス人（アングロ・アイリッシュ）＞という，マクドナの人種的文化的背景は，のちにみるように，劇作における雑多な要素の融合を可能にしている。かつて＜アングロ・アイリッシュ＞と言えば，英国との文化的政治的紐帯を持つプロテスタントの支配者階級の人たちを指すのが通例だったが，今日では，英国移住し，英国風の発音や姿勢を身につけながらも，アイルランド文化とのつながりを再確認しようとする，カトリックの移民世代を表すようになってきているという。音楽の分野ではポーグス（The Pogues）のヴォーカルだったマガウアン（Shane McGowan），スポーツの分野では，Leeds Unitedに所属し，World Cup優勝のイングランドチームで活躍したチャールトン（Jack Charleton, 1935-），そして演劇界ではこのマーティン・マクドナがその代表格である。この若い世代は，親の移民世代のような，母国への切ない郷愁や，アイルランド社会・カトリック教・愛国心などの束縛が稀薄であり，＜アイルランド＞はもはや信仰やナショナリズム，血縁とも無縁であり，マクドナがもっとも強く影響を受けているのは，アイルランド訛として観念的に想定される＜声と口調＞，つまりアイルランド語法のリズムと構文であるとされる。それを分析する文体論からのアプローチは別の機会に譲るとし，拙稿では，マクドナが現在まで発表した全4作品の内容を詳しく紹介し，筆者なりの解釈を施したい。

II　発表作品の梗概と解説

作　品　名	初演年月日	初　演　場　所
①*The Beauty Queen of Leenane*	1996. 2. 1 1996. 3. 5 1998. 2.26	Town Hall Theatre Royal Court Theatre Upstairs（UK） The Atlantic Theatre Co., NY
②*The Cripple of Inishmaan*	1996.12.12 1998. 3.17	Cottesole （RNT） The Joseph Papp Public Theater
③*A Skull in Connemara*	1997. 6. 3 1997. 7.17	Town Hall Theatre Royal Court Theatre Downstairs
④*The Lonesome West*	1997. 6.10 1997. 7.19	Town Hall Theatre Royal Court Theatre Downstairs

表の①③④がコネマラ地方に実在する村リーナン[8]（Leenane）を舞台とする三部作

であり，②だけがアラン島が舞台である。1996年2月から97年6月までの僅か1年4か月の間に4本もの芝居が連続して初演され，「シェイクスピア以来」と誤って喧伝されることもある，＜4作品同時上演[9]＞の快挙を成就している事実には驚かされる。最新作から3年近くがすぎているのが若干気がかりであるが，アラン島三部作として続編の二つの芝居（『イニシュモアの中尉』 *The Lieutenant of Inishmore*，『イニシアーの泣き妖精たち』 *The Banshees of Inisheer*）を構想・執筆進行中であり，しかも前者は，これまでの最高傑作となるかもしれないと著者自らが語るほどの自信作と聞くので，委嘱しているロンドンのRoyal National Theatreでの早い時期の上演を期待したい。以下には，『リーナン三部作』①③④を発表順に，続いて初演順位は2番目だったが，現時点では『アラン島三部作』の単作にあたる作品②を概観していきたい。

1)『リーナン村のミス・コン女王』（全9場）

アイルランド西部の田舎家の居間兼台所が舞台。戸外は豪雨。70代初めのずんぐりとしたマグ・フォラン（Mag Folan）が揺り椅子に座っている。この家の3姉妹の末娘と思しき，痩身で40歳のモリーン（Maureen）が買い物から戻る。留守中に作って飲んだコムプラン（粉末スープか）が溶けずに固まって困る，とか，ポリッジを拵えてくれ，ラジオをつけよう，お茶はまだか，と矢継ぎ早にうるさくせがむ老母にモリーンはうんざり。ラジオから流れるアイルランド語の歌声は，マグには「たわごと」にしか聞こえず，どうして英語を喋らないのか，と尋ねる。モリーンは，アイルランドではアイルランド語を話すべきで，英国人が我々の言語や土地を奪ってさえいなければ，わざわざ英国へ出稼ぎに行く必要もなかったのだ，と反論。移民に人気のアメリカへ行ってもアイルランド語は役立たずだし，昨今，ダブリンでは老婆が赤の他人に絞殺される物騒なご時世だから，挨拶なぞろくすっぽできないほうがまし，と隣近所への娘の不愛想ぶりを皮肉るマグに，その殺人鬼とやらが訪ねてきて老母（あんた）を惨殺してくれるなら，自分も巻添えをくって殺されようとも構わない，とモリーンは嫌味で返す。お茶に砂糖が入っていないわよ，というマグの台詞にモリーンの忍耐の糸は切れ，お茶を流しに捨て，食べかけのポリッジもごみ箱へ放り投げ，渋面をして去っていく。（1場）

マグが手鏡で髪を整えている。テレビでは『サリヴァン家』の再放送が放映中。20歳ぐらいの若者レイ・ドゥーリー（Ray Dooley）が来訪。ウェルシュ神父の中古車を買うこと，神父は普段は暴力をふるわないが，マーティン・ハンロンの頭をぶん殴ったことがある，といった世間話を終えて，ようやく肝心の用件を切り出す。英国から一時帰国している兄のパトウ（Pato[10]）から，アメリカから来た叔父さん一家の送別会が明晩7時にあり，ぜひ招待したい，とモリーンに伝えるようにマグに依頼する。要領を得ないマグにわざわざメモ書きまでして渡すが，レイが出ていくと，マグはそのメモ書きをマッチで燃やしてレンジに捨てる。直後にモリーンが帰宅し，留守中の電話と来客の有無を尋ねる。マグは嘘をつくが，レイが来た事実を小出しに漏らす。帰宅途中にレイの姿をみかけたモリー

ンは，わざと塊だらけのコムプランを拵えて母親に出し，飲み残しは頭からぶっかけてやる，と脅す。娘時代からもう既に20年も母親に顎で使われて婚期を逸し，40歳のこの年までたった２人の男とキスしかしたことがない，と憤り，母親が死んで棺に横たわり，喪服姿の自分の腰に男が手を回し，葬儀のあと家で飲まないかと，誘惑される白昼夢を見る，とモリーンが言えば，あんたが70歳になるまで（つまり自分が100歳になるまで）死なないよ，その時には誘ってくれる男などいない，とやり返すマグ。ふたりはビスケットの嗜好でも対立するが，あとで一緒にウェストポート（リーナンから北東へ約40キロの町）までドライブしようとモリーンは誘う。マグは喜ぶが，明晩のパーティ用ドレスを買いに行くためと知って，不機嫌になる。（２場）

夜。少し酔って歌を歌うパトウとそれを静かにさせようとするモリーンの声が聞こえる。二人が入ってきて，部屋の明りをつける。モリーンはミニの黒いドレス姿，パトウは同い年40歳ぐらいのハンサムな男。マグが消し忘れたラジオの音で，キスの音がかきけせると，二人は長いキスを交わす。母親を苛めるためにわざとまずいビスケットを買っている，とモリーンは言い，そのビスケットを一箱食べて１週間病気になったコウルマンは，弟の愛犬の耳を切り落として袋に入れてしまっている，といった村の噂話が続く。お茶をいれるモリーンを彼は背後から抱き締めるが，照れて椅子に戻り，「リーナン村のミス・コンテスト女王」だった美貌の彼女にこれまで声をかける勇気がなかったこと，英国の出稼ぎ生活が長く，今度もすぐ火曜日に戻らないといけない，と嘆く。ロンドンにいると美しい自然のリーナン村に戻りたいと思うが，いざ戻ってみると，狭い閉鎖的な共同体に嫌気がさし，他人のことなど気にかけない英国社会もそれはそれで悪くはないと思える，とパトウは語る。将来の結婚話に及んだとき，ラジオからデリア・マーフィ[11](Delia Murphy)の『紡ぎ車』(*The Spinning Wheel*)の曲が流れる。パトウが送別会で馴々しくしていた女性ドローレスのことを嫉妬すると，彼女は自分の又従姉妹(またいとこ)だと答え，スナック菓子(Taytos)がブラウスに落ちたのでこんな風に払いのけようとしていただけさ，とモリーンの胸に手を伸ばして愛撫する。モリーンはその手を押さえたまま，彼の膝の上に座り，愛撫を受けながら彼の頭をさする。「今夜は泊まって頂戴」「もっと下へ」とモリーンは促し，パトウの手が股間に達するや，軽くのけぞる。（３場）

翌朝。モリーンの脱ぎ捨てた黒いドレスがテーブルの上。マグが玄関から尿瓶(しびん)を持って現れ，流しに中身を流す。こんなドレスが40ポンドもした，と隅に放り投げ，早くコンプランとポリッジを拵えて，と大声で怒鳴る。シャツに袖を通しながらスボン姿のパトウが挨拶をして現れ，マグは唖然となる。こっそり逃げ出そうとも思ったが，お互いもう大人だから構わない，とモリーンが言うので出てきた，とマグに朝食を作ってやりながら語る。コンプランは好物ではなく，無理やりに飲まされている，とマグ。やがて，ブラにスリップ姿のモリーンが現れ，この家にはもうじゅうぶん，手のかかる赤ん坊がいるから，妊娠しないように気をつかったわよね，と言って，パトウと長いキスを交わす。マグが自分の掌の火傷は，モリーンがレンジに押しつけたり，深鍋の脂を注いだりしたせいだ，と告発すると，モリーンはパトウに流しの悪臭を嗅がせ，マグが毎朝尿を流しながら水も流さない，と暴

露する。すると今度はマグが，かつてモリーンは英国の精神病院ディフォード・ホール(Difford Hall)に１か月収容された病歴があり，自宅療養する約束で出所したのだ，と内輪の秘密をばらす。自分も含めて誰だってノイローゼになるもので恥じるに及ばない，過ぎたことは忘れよう，とパトウは慰める。モリーンは病気の当時を回想する——25歳で初めて英国のリーズに渡り，事務所の清掃作業をしていたとき，アイルランドの田舎娘だというので同僚の苛めにあい，英国訛りの悪口も理解できずにいたこと，同僚のトリニダード出身の黒人女性の母国の写真を見て，どうしてこんないい国を離れたの，と言ったことがあったが，逆にコネマラの写真カレンダーを見せると，同じ質問をされたこと…。——しかしマグの火傷に関しては，親子喧嘩の後，ひとりでチップスを揚げようとしてフライパンをひっくりかえした母親の過失であって，決して自分が火傷を負わせたのではないと否定する。モリーンの「こんな暮らしを続けなくてはいけないの？」という思い詰めた問いかけにパトウは答えず，彼の「服を着ろよ」という台詞を，昨夜の愛が覚めたものと曲解して，モリーンは取り乱す。精神病院入院の証明書類を捜し出したマグが戻ってきたので，英国から手紙を書くと約束して，パトウは去る。モリーンもドレスを拾って退場。マグはポリッジに指を突っ込み，冷めてしまったわ，と叫ぶ。(４場)

ロンドンの寝室のテーブルに座るパトウが，書き上げたモリーン宛ての手紙を読み上げる。暗闇の中，パトウにだけ照明。手紙の内容は，まず筆無精を詫び，昨日，工事現場で同僚に事故があったこと，週末には飲みに出ることなどを書いて本論に入り，「服を着ろよ」発言が誤解を招いたとしたら本意ではない，本当はずっと君の下着姿を見ていたかったし，もし許してくれているなら，実は，ボストンにいる叔父が仕事を斡旋してくれることになったので，一緒にアメリカに行ってほしい，１，２か月準備期間を設けてもいいし，母親マグの世話は他の姉妹にお願いするか，オーターランドにある老人養護施設も娯楽があって悪くない，住所と電話番号を記しておくから，よかったら連絡してほしい，駄目だとしても，二人で過ごしたあの夜のことは(なにも起こらなかったけれど)幸福な思い出として忘れない，と朴訥な筆致ながら，真摯に綴る。——照明が落ち，舞台は暗闇のなか，パトウは続いて，弟レイ宛ての手紙を読み始める。３通の手紙を同封するので，いずれも読まずに本人に渡してほしい。１通はミック・ダウド宛てで，彼の退院後でもよいが，症状と殴った犯人が逮捕されたか否か，知らせてくれ。２通目はガーリーン宛てで，司祭に惚れるのはやめろ，という内容。最後の３通目がモリーン宛てで，受領当日すぐに，必ず直接本人に手渡してほしい，と追伸でも執拗に念を押す。(５場)

午後。レイが立ってテレビを，マグは座って彼と手紙を見ている。番組が終りテレビを切る。レイはモリーンの帰りを待ちくたびれている様子。レイは10年前，畑にとんでいったスウィング・ボールをいくら頼んでもモリーンが返してくれなかったことをいまだに根に持っており，先日も道で会って彼女に挨拶したのにまったく無視された，と怒る。寒いから暖炉に泥炭をくべるようにマグは頼み，レイは手紙をテーブルに置いて，不承不承従う。使った火掻き棒(ポーカー)が警官を殴るのにお誂えだから

売ってくれと言い出すが，マグは暖炉に必要だから，と断る。ふたたび手紙をつかんでモリーンの帰りを待つが，テーブルを拳で叩いたり，じりじりしている。帰りは夕方，ことによると夜か早朝になるかも，とのマグの言葉に，ついにレイは手紙をマグに預けることに決断し，開封せずに必ず神にかけてモリーンに渡すように確約させて退場。だが，ドアは半開きで，戸外でレイはしばらく様子を窺い，突然，顔を出し，マグが約束を守っていることを確認して，本当に去っていく。マグはやおら立ち上がって封筒を開き，レンジの蓋を開け，手紙の1頁を読み終えるや炎のなかへ投じ，2枚目を読み出す。(6場)

夜。マグは揺り椅子に，モリーンはテーブルで読書中。受信状態の悪いラジオ放送をマグが嘆くと，耳が遠くなったようだから，鱈と豆つきパンの食事を強制する難聴者施設に収容するわ，とモリーンは脅す。パトウの送別会に招待されていないので不機嫌なのだ，とマグが水を向けると，読書の趣味や政治観の相性が一致することが重要で，床上手なだけでは駄目，送別会出席は遠慮する旨を自分からパトウに伝えてある，とモリーン。ショートブレッド・フィンガーを男根のように揺すって彼との性体験を自慢しても，マグは曖昧な反応しか示さず，モリーンは不審の念を抱く。深鍋をレンジにかけ，食用油を半分注ぎ，ゴム手袋をつけ，逃げようとするマグを椅子に座らせ，油が沸騰するのを待つ。弟のレイから聞いた，とか，処女の面影がお前にはいつもあるから，と苦し紛れの弁明するが，モリーンがラジオの音量をあげ，煮え油を運んでくると，耐えきれなくなって，「手紙を読んだ」と告白する。しかし，モリーンはマグの掌を熱いレンジの上に置き，ゆっくりと煮え油を注ぐ。老婆は苦痛と恐怖で悲鳴をあげ，手紙は燃やしたこと，一緒にアメリカに来てくれと，書いてあったことを白状する。驚愕のあと喜びの陶酔に変わるモリーンに，私の介護をする必要があるから土台無理な提案だ，私はどうなるの，と哀願するが，モリーンは煮え油の残りをマグの胸のあたりに浴びせ，そのしぶきが顔に飛び散り，マグは床に倒れて痙攣しながら泣きわめくが，モリーンは喜びに浸っている。パトウの送別会終了の時刻に気づいて，慌てて思い出の黒いドレスに着替え，伏せるマグをまたいで玄関から飛び出す。いったん車のキーを取りに戻るが，ラジオを切って再び彼女は出て行く。マグは火傷した掌を見下ろしながら，誰が私の面倒をみるの？と呟く。(7場)

同じ日の夜。レンジの黄色い炭火の明りだけが，前後に揺れる揺り椅子に不動の姿勢で座るマグのシルエットを照らしている。モリーンは黒いドレスのまま，火掻き棒(ポーカー)を手にゆっくりと室内を歩き回り，以下の長い独白を行う。——出発直前に鉄道駅でパトウとの再会を果たし，音信不通だった理由を告げるや，すぐに誤解は氷解，キスと抱擁で互いの愛情を確認。懸案の老母マグの世話は，老人ホームか他の姉妹に任せられないか，と尋ねるパトウに，施設は高額な費用がかかるし，姉妹はマグとの同居を望まず，今年は母の誕生日さえ忘れている，とモリーン。やがて発車時刻が迫り，映画の一場面さながらに，車窓ごしにキスを交わして，親の世話の件が解決するまで1か月でも1年でも僕は君を待つ，と言うパトウに，1週間もかからないわ，と叫ぶモリーン…。——このとき，揺り椅子の揺れがやみ，マグがゆっくり前のめりになって，どすんと床に倒れる。すでに死んでおり，頭部側面

の頭皮から真赤な頭蓋骨の塊がのぞいている。モリーンはうんざりした様子で死体を見やり，靴の足先で死体の脇腹を軽く蹴り，背中を踏みつけにしたままで，＜この人は垣根の踏越し段で足をすべらせて，丘を転げ落ちたのよ＞と自らに言い聞かせるように呟き，物思いに耽る。（8場）

雨模様の午後。母親の葬儀を終えたモリーンが帰宅し，台所の棚からコンプランとポリッジの箱を下ろして中身を火中に投じ，埃だらけのスーツケースを持ち出して，荷造りの思案。そこへレイが訪ねてくる。審問検死に手間取って葬儀日程が遅れ，あいにくの天気で参列者も僅かだったと語るモリーンに，70歳だから天寿を全うした，自分は退屈なアイルランドを出て，ロンドンかマンチェスターで麻薬でもやりたい，とレイ。食料の焼却処分は勿体ないと，故人の余り物のビスケットまで貰い受け，長々とつまらぬお喋りを続けるレイにモリーンはしびれを切らす。レイの用件は，兄パトウから手紙で依頼された伝言をモリーンに伝えることで，それはマグ死去への弔意と，出発の夜に会えなくて別れの挨拶も言えずに終わったのは残念だが，君がそう望んだのだから仕方ない，という内容。駅でパトウをちゃんと見送ったわ，と当惑して主張するモリーンに，兄は列車でなくタクシーで出発した，と怪訝なレイ。さらに追い討ちをかけるかのように，以前，叔父の送別会に来たドローレスと，パトウが1週間前に婚約したことを報告する。愕然とするモリーンに一向に気づかず，挙式が来年なら，サッカーの欧州大会開催年［1996 or 2000］と重なり，サッカー不人気のアメリカではテレビ放映がないだろうから観戦できない，と嘆いたり，ドローレスの旧姓がフーリー（Hooley）なら結婚後ドゥーリー(Dooley)と改姓されても1文字違いでたいして変わらないが，3文字違いのヒーリー(Healey)だったら面倒だ，と馬鹿話を続ける。パトウ婚約の知らせに依然として茫然自失のモリーンを，レイは「狂人」(loon) 呼ばわりして侮辱，モリーンは火掻き棒をつかんで背後からレイに近づく。そのとき偶然彼は，出窓に隠れていたテニス・ボールを発見し，激怒してモリーンに向かう。1979年に10ポンドもしたセットを親にねだって買って貰ったのに，2か月使っただけでモリーンが取り上げて返してくれなかった例のボール。ただ単に腹癒せで没収し，自分では使いもせずに隠しておいたなんて許せない，とレイは憤慨する。モリーンは呆然として火掻き棒を床に落とし，なぜそんな意地悪をしたのか，自分でも分からない，その当時は気が確かでなかったせいだと，弁明する。謝意があるなら，その火掻き棒を売ってくれ，とレイはまた頼むが，「それには感傷的な価値があるから」とモリーンは断る。再び怒って退出しかけたレイに，パトウへの伝言をモリーンは依頼する。＜リーナン村のミス・コンテスト女王がよろしくと言っている＞という第1案を考え直して，＜リーナン村のミス・コンテスト女王がさようならと言っている＞に変更する。出がけにラジオの音量を大きくするよう頼んだり，レイを「パトウ」とうっかり呼び間違えるので，母親と生き写しだ，と悪態をついて彼は去っていく。ラジオから流れるチーフタンズの曲を揺り椅子で聞いていると，アナウンサーが，モリーンの二姉妹アネットとマーゴ（Annette and Margo Folan）が寄せた，母親マグの71歳の誕生日を祝うリクエスト葉書を読み上げ，マグのいっそうの長寿を祈って，マグの好きなデリア・マーフィの『紡ぎ車』の曲を流す。しばらく聞いていたモリーンは立ち上がり，スーツケースを

手に，揺れている椅子を見つめた後，家を後にする。曲は最後まで流れ，やがて椅子の揺れがおさまると，ゆっくりと溶暗。（9場）

一言で言えば，同居母娘の愛憎劇。この戯曲のような，40歳の娘と70歳の母親の二人暮らし，あるいは60歳の息子と90歳の母親の同居（後述の『イニュシュマーンの跛』）はアイルランドの過疎の田舎では珍しい例ではないだろうし，高齢化の進んだわが国でも，こうした中高年による老親介護の実例は少なくない。芝居の途中まではわれわれの同情はやはりモリーンに集まるだろうが，彼女が折檻まがいの体罰を与える場面，とくに熱い油を実母の掌に垂らしていく場面は，おぞましいとしか形容できぬ凄惨な場面であり，共感はいちどきに薄れていくかもしれない。だが考えなくてはならないのは，モリーンにとってもっとも安易な逃げ道は，――駆け落ち相手の有無にかかわらず――厄介者の母親など見捨てて蒸発することだったはずであり，彼女はその楽な方法を選ばなかったことである。おそらく若い20代のときの彼女は，マグに対してそれほど強い嫌悪や憎悪は抱いていなかっただろう。しかし適齢期とされる時期をすぎてなお，母親が彼女の交際相手に厳格な道徳基準を要求して自由意思の恋愛を阻止し，互いにいがみあうだけの長い不毛な年月の蓄積が鬱屈した憎悪を形成していったと想像される。現在までモリーンが頑なに純潔を守り通したのは（また，相手のパトウもどうやら童貞ないし性的不能と推測されるのは），カトリックの教えに束縛されてきたためだろうか。あるいは異国でのいじめで傷ついた彼女の精神の脆さゆえだろうか。この悲劇の責任を，アイルランドの社会福祉行政の貧困に転嫁してはならないだろうが，こうした不幸な事件を回避するためには，なんらかの制度面での施策も求められるだろう。劇作の観点からは，9場におけるどんでん返しは圧巻である。見送りの際にパトウに会えなかったモリーンが，絶望と憤怒の余り，帰宅後に母親を鈍器（火掻（ポーカー）き棒）で殴打して殺害したのが事件の真相で，失恋の苦悩に直面できなかった彼女の自我が，恋人と会えてすべての問題は解決した，という思い込みの幻想を無意識のうちに作り上げたらしい。レイから事実を聞かされても，最初のうちなかなか信じられないほど，この自己防衛反応の壁は堅牢であり，母の死によって呪縛を解かれ，住み慣れた家を後にするモリーンの行く先が，自首のための警察署なのか，誰にも知られない異国での，解放された独立の新生活なのか，それとも冷たい水底なのかは，知る由もない。

2)『コネマラの頭蓋骨』（1幕全4場）

この奇怪な標題は戯曲の内容ともちろん合致するが，もともとはサミュエル・ベケット（Samuel Beckett,1906-89）の戯曲『ゴドーを待ちながら』（*Waiting for Godot*, 1955）1幕終盤の，ラッキー（Lucky）による句読点省略の長い独白の台詞[12)]に由来する。

晩夏9月のゴールウェイの民家の質素な居間が舞台。肘掛け椅子に座る50代の主ミック・ダウド（Mick Dowd）のもとへ近所に住む70代で白髪の老婆メアリージョニー・ラファティ（MaryJohnny Rafferty）が訪ねてくる。27年も前に教会の敷地でおしっこしている子どもたちを叱ったら「デブおばん」と呼ばれた屈辱をいまだに忘れないでいる。メアリーの孫で20歳前後のマーティン（Mairtin Hanlon）がサッカーの＜マンチェスター・ユナイテッド＞の服で登場。メアリーとの世間話から，父親は毎日のようにベルトで体罰を振るう乱暴者らしいこと，ディスコの乱闘事件で友人のレイ・ドゥーリーが逮捕された現場に居合わせたが，逃走した共犯者は，片足が不自由な自分ではない，と言う。熊さんやお魚が歌詞に出てくる子どもじみた聖歌隊の練習（著者マクドナの体験が反映されているだろう）に退屈してマーティンは中座し，神父からの依頼伝言を預かってきたのだが，それはミックが担当する，墓の掘返し作業（exhuming business）――マーティンの別の言葉では「墓荒らし」（graveyard shenanigans,97）――の助手の仕事を週給20ポンドで請負わせてほしい，という内容だった。先月マグ・フォランが死んで［『リーナン村のミス・コン女王』］墓地の敷地不足問題は焦眉の急である。かつて掘り起こされた自分の両親を初めとする親族たちの遺骨をミックがどこへ移したのか，メアリーは知りたがるが，司祭と警官の双方から遺骨処分先を口外せぬように指示されており，ハンマーで粉々にしてセメントの混濁液に混ぜた，とか，湖に捨てた，などと曖昧な答えをする。しかしメアリーがなおもしつこく尋ねるので，遺骨は袋詰めにして湖底に沈め，懇ろに祈りを捧げて安置していると返答すると，メアリーはやっと安堵する。数年前に死んで腐臭を放った迷い牛の死体の話を始めたマーティンをミックは侮辱し，詫びのしるしに酒をねだられるや，指先にたらした酒を聖水のようにはじいて彼の目にとばし，「意気地なし野郎」（a wussy oul pussy）とからかう。マーティンも反撃に出て，今回掘り返す現場は，埋葬後7年以上経過した，破風に近い南側の墓地で，ゆくりなくもミックの亡妻ウーナ（Oona）の墓だと告げる。亡妻の墓を夫が掘り返すのは不謹慎，とメアリーは反対するが，マーティンごときに任せると頭蓋骨がまっぷたつになる，とミック。だが，もうとっくにまっぷたつ，という噂だとマーティン。7年前，自分の酔払い運転で，シートベルトを装着していなかった妻を死なせたのは事実だ，とミックは認めるが，故意に塀に衝突して女房を殺した，ともっぱらの噂だとマーティンは反論し，家から追い出される。孫息子ながら口さがない不良少年で申し訳ない，村の誰もあんたを中傷してはいない，とメアリーはミックを励ます。（1場）

夜の墓地。墓石のある2つの墓のうち，右手の墓穴にミックが腰の辺りまで入って土を掘り出し，一方，マーティンはシャベルを置いて右手墓石に凭れて座り，タバコに火をつけ休憩中。避けるかの

ように周囲の墓ばかり掘り返し，いつになったら隣のウナの墓掘りに着手するのか，と訊き，自分一人で掘り始めるしぐさを見せるマーティンに，手を触れぬな，とミックは威嚇し，墓掘りは村への＜勤め＞なのだと諭す。マーティンが，ミックが過去に刑務所に収監されて果たしたのも＜お勤め＞だ，と悪口を言えば，ミックもマーティンが高校卒業資格試験を2度落第し，生物の授業時間にハムスターを調理した事件で退学処分になった件を持ち出すが，真犯人は盲目のビリー・ペンダー(Blind Billy Pender)で自分は濡れぎぬをきせられたと反論する。いずれにせよ，あらぬ噂の立たぬように警官立会いの下で亡妻の墓は掘る，と言っていると，朽ちた棺の木を掘り当てる。ダニエル(Daniel Faragher）という男の遺体で，まだ頭髪が付着しており，まるで大きな人形のようだ，とマーティン。1ポンドを賭けて，この男の享年をマーティンが当てようとするが，墓石に刻まれた生没年を盗み見しながら，愚かにも引き算を間違えて負けてしまう始末。その頭髪つき頭蓋骨をミックがマーティンに手渡すと，既に布袋に収納した他の2つの頭蓋骨と比べて，両乳房のように自分の胸に押し当てたり，頭蓋骨同士キスさせたり，眼窩に指を突っ込んだりして，冒瀆的にもてあそぶ。頭蓋骨を返した後，どの遺体にも性器がついていないのはなぜか，とマーティンは不審がる。性器が主の御目に触れるのは罪であり違法であるから，遺体から切断し，犬の餌として放浪者(ティンカーズ)[13]に売るのだ，大飢饉の時代には彼らは犬にやらずに，自らむしゃむしゃと試食していたものだ，そういうアイルランド史の初歩も知らんのは若い世代の困ったところだ，とミックは答える。この話が信じられないマーティンは，ウェルシュ神父に真偽を確認に出かけていく。ミックは遺骨を袋に収め終わると墓穴から出る。舞台左手の亡妻の墓へ行き，両手をポケットに入れてしばらくじっと墓を見つめる。右手からレイの兄で30代の警官トマス・ハンロン（Thomas Hanlon）が制服姿で登場。彼はタバコと喘息用吸入器をときどき吸う。ダンス・ホールで女同士の喧嘩があり，仲裁に入った男が逆にその二人から殴る蹴るの暴行を受けるもめ事があって遅くなったとトマスは詫び，ミックは亡妻の墓堀作業を開始する。トマスは隣の墓石に腰を下ろし，墓堀りは嫌な仕事だから火葬を奨励すべきだ，と提案する。死んで間もない遺体の散乱現場を職業柄，見慣れているのでは，と訊かれたトマスは，遺体を見たのは一度だけで，テレビをつけたまま，ものすごい肥満体の男が全裸で肘掛け椅子に座って死んでいた事件で，心臓発作という医師所見はまあよしとしても，男の家の大型冷蔵庫にジャムとレタスしかなかった，のがなんとも不自然で，調書にもそのことを特筆したが，一笑に付された，と語る。ミックは，素っ裸だった理由は，真夏で客も来ないと思ったからだろう，と言うが，それでは冷蔵庫の食料の少なさの説明にならない，と反論する。同様に，学校での動物調理のいたずら事件の対象が，猫だったかハムスターだったかはどうでもよいことではなく，捜査において細部を揺るがせにしないことが事件解決につながる，と力説する。そこへ神父から手の甲で殴られて帰ってきたマーティンが，墓地内で粗野な言葉遣いを連発するので，トマスと口論になる。警官は少年虐待の専門家で，友人レイ・ドゥーリーは逮捕直後入院した，警察は市民に奉仕するためにこそ存在すべきで，人権侵害をするな，とマーティンが生意気に言えば，裸足なのを忘れて独房の扉を蹴とばして足指を骨折したレイが

愚かなだけ，とトマス。ミックはマーティンに，発掘の済んだ右側の墓穴を埋め直すように命じる。その作業中，トマスはマーティンの背中を突いて墓穴に落とす。怒ったマーティンは帰宅しようとするが，ちゃんと手伝いをしないのならバイト料を減額させるぞ，と脅されて，ふたたび墓埋作業に戻る。トマスはミックに，亡妻の墓をあばくのは，なにかと不安だろう，と歯に衣着せた物言いをし，怒ったミックはトマス，マーティン兄弟を「馬鹿とごろつきの一族」と侮辱する。トマスは自分の先ほどの揶揄は＜曖昧なほのめかし＞に過ぎず，ミックの明瞭な＜侮辱＞発言には＜侮辱＞発言で報いよう，と切り返すと，早合点したマーティンは「ホモとレズの両親からどうしてあんたが生まれたのか，宇宙の謎だね」とまるで小学生並の悪口を浴びせ，二人は呆れかえる。トマスは，ウナの頭部損傷は車の衝突事故以前に負ったもの，つまり交通事故以前にすでに死体だった可能性がある，と示唆すると，今度はミックが烈火のごとくに怒りだし，発言撤回を互いに主張し合うが，ミックが先に譲歩して「馬鹿とごろつき」発言を取り消し，トマスも「女房殺し」を撤回するが，睨み合いは続く。ミックが殺人犯でないと知って落胆したマーティンが，70歳すぎの老人マーカス（Marcus Rigby）が耕耘機（トラクター）で双子の子どもを轢き殺した事件に言及すると，交通安全の精神を弟に植えつけるために自分がでっちあげた作り話だったと，トマスは初めて暴露する。マーティンは怒るが，作り話にせよ，そのお陰でお前が事故にあわずに済んだことが大事であり，アイルランドでは昨年，セメント懸濁槽（スラリータンク）に落ちて死亡した8歳男児の数が14人に上ることを紹介する。その統計に異議を唱えるミックに，コンバイン収穫機で事故死した7人よりは多い，とトマスは釈明する。セメント懸濁槽（スラリータンク）の方がコンバイン収穫機より絶対数が多く，高価なコンバイン収穫機を購入できる金持ちの息子は利口者だからコンバインで遊ばない，だから，そういう統計値になるのは当たり前の話だ，とミックは攻勢に出る。マーティンがこの論争にいらぬ半畳を入れたので，トマスはまた彼を墓穴に突き落として，土を蹴りかけ，兄弟喧嘩になりかける。そのとき，ミックのシャベルがついにウナの棺の蓋を掘り当てる。だが，すでに棺の板材は壊されており，最初はシャベルで，次には素手で狂ったようになって土を掘り返すが，どこにもウナの遺骸は発見できず，「亡妻（あいつ）が消えた」と，静かにミックは呟く。（2場）

1場と同じ場所で，一両日後の夜。テーブルには3つの頭蓋骨と遺骨が並べられ，木槌を持ったマーティンは酒を飲んでぼんやりしながら，それを眺めている。舞台袖でやはり酩酊したミックが自分用の木槌を探している。ウナの遺骨を盗んだ連中を見つけたらどうするのか，とマーティンが訊き，その窃盗容疑者リストにマーティンの友人たちやマーティン自身はまさか載ってないだろうな，とミック。自分の欲しいのは現金であって，遺骨なんかじゃない，とマーティン。やがて木槌を見つけ出したミックが舞台に登場し，遺骨窃盗となにか関係してはいないだろうな，と真剣に詰問するが，マーティンが視線を逸らさずに否認したので，嫌疑をかけたことを謝罪し，握手する。頭蓋骨がいまにも笑いだすのでは，と怯え気味のマーティンの眼前で，ミックは最寄りの頭蓋骨を木槌で叩いて粉砕し，床に落ちた破片は足で踏みつぶす。遺骨は湖底に安置する，というメアリーへの説明（1場）

と話が違う，と驚くミックに，長年，わしの悪評を垂れ流してきた連中が死んで骨になって手元にある以上，叩き割られて当然だ，とミック。これ以降，ミックとマーティンは一緒に木槌で遺骨粉砕作業をずっと続けながらの会話となる。マーティンは肥満女性だったビディ（Biddy Curran）の恥骨を叩き割って，ハムスター調理より愉快だと興奮し（つまり，真犯人は自分であることをさらけだし），ミックはダンの遺骨を粉砕する。泥酔してきたマーティンは，頭蓋骨叩きは女房殺しよりも愉快か，と例の噂話を蒸し返してすぐに詫び，ソルトヒル（Salthill）に住むある酔払いが，尿瓶を枕に眠りこんでしまい，尿で溺死した逸話を持ち出す。それが自分の尿か，他人の尿か，詮索好きなトマスならこだわるだろうな，とミックがからかうと，マーティンも兄は『刑事スタースキ&ハッチ』（*Starsky and Hutch,* 1975-79）の<はみだし刑事かぶれ>だ，と同意する。叔父が3人も嘔吐（ゲロ）を詰まらせて死んだ，とミックが言えば，それは黒人歌手ジミー・ヘンドリックス（Jimi Hendrix, 1942-70）の例のようにありふれた死因であり，小便で死ぬ自分の話の方が珍しい，と変な自慢話をする。腹這いになって顔を横へ向ける実演をしてみせ，嘔吐窒息が心配なら，なおそのうえに枕をのけるのがベストだ，とミックは忠告し，若くして死んだ叔父たち（1人はボストン移民）を思い出して，涙ぐむ。やがてふたたび，遺骨粉砕作業に取りかかるが，ミックはBGMが必要だとして，デイナ（Dana）の'All Kinds of Everything'のレコードをかけ，デイナ・ファンのマーティンは喜ぶ。やがて，もしこれがウナの遺骨でもこんなにがむしゃらに粉砕するのかと訊かれ，敬意を抱いているからそんな真似はしない，とミックは答える。すると，マーティンはうっかり口を滑らせ，女房の遺骨を盗んだ奴らへの怒りで骨に八つ当たりしているようだが，連中は遺体の首にかかっていた，あんたの写真入りのバラ色ロケットまでくすねた，きっとゴールウェイの質屋で1ポンドの値もつかぬ安物に違いないが，あんたを愚弄する狙いだったんだろう，昔，自分が大事にしていた『スター・ウォーズ』人形3体を盗んだのもあいつらだったかも，と問わず語りに喋り散らし，まったくその重要性に気がつかないでいる。ミックはしばらく思案したあと，砕いた遺骨の大きな塊を袋に詰めさせ，湖底に安置して弔うために自分の車で一緒に行こう，とマーティンを誘う。泥酔状態にあるのに関わらず，大丈夫だ，俺が運転する，と言い張るマーティンに，いともあっさりと車のキーを渡すミック。遺骨袋を運びだし，あんたの<実績>を知っているから絶対にシート・ベルトをしておこう，と戸外で笑うマーティンの声に，木槌をもてあそびながら，「結局は同じことになるさ」とミックは呟き，消灯して退場。車のエンジン音が響く。（3場）

ミックが帰宅し，点灯。シャツは血だらけで，木槌に付着した血を拭い，散乱した遺骨片を箒で掃いて別室に押し込み，肘掛け椅子に座る。メアリーが登場。ビンゴ大会の帰りで今日はツキがなかったと嘆く。ミックのシャツの血を赤ペンキと誤解し，ウナの墓が荒らされた知らせを聞いて我が身を案じるが，骨太のメアリーの遺骨を盗むには軽トラックがいるから心配無用，とミックは辛辣に応じる。メアリーは村の噂話——アメリカ人観光客相手に露骨なベトナム戦争批判ジョークを言ったために，観光ガイドをレイが首になったこと，兄（パトウ）の結婚式参列に来月ボストンへレイが行く

こと――を伝える。自分の場合は，婚約期間が5年もあって互いの欠点を認知しあうことができた，と語るミックに，ウナの最大の欠点は何だったのかと，メアリーは尋ねる。チーズやパンを開封後にきちんと包み紙にしまわないとか，炒り卵料理が下手だったとか，些細な欠点はあったが，いつも先頭に立って，世間の非難から自分を擁護してくれたウナの元気な声が懐かしい，とミックは答える。一体，遺骨窃盗犯は誰なのかねえ，と思案しているところへ警官トマスが小さな袋（鞄）を持って登場。メアリーを厄介払いしようと努めるが，腰を上げないので，袋から頭蓋骨を1つ取り出し，額にあいた大きな割れ目を示しながら，＜鈍器等による妻殺し＞の供述調書に記入，署名してほしい，とミックに告げる。意外にも，ミックは二つ返事ですぐさま了承し，トマスから受け取った用紙2枚に記入していく。ウナの頭蓋骨を手に，まさかミックが噂通りの犯人だったとは，と驚くメアリーに，只酒をせびりに来たり，アフリカ難民支援と称してビンゴ狂いになって参加景品の蛍光ペンをしこたま持っているようなことこそ不道徳だ，そんな不潔な手で妻の頭蓋骨に触るな，と命令する。頭蓋骨の発見場所が田圃の奥とトマスから聞いたミックは，雌牛が迷いこんで野たれ死んだと，マーティンがかつて話題にした付近だろう，実際にはパトウの飼牛を誘導してレンガで殴打したのが真相かもしれないが，と皮肉り，これは＜状況証拠＞ではなく＜伝聞証拠＞だと，トマスの揚げ足を取る。調書記入に際して，「痙攣」を意味する‘convulse’の同義語をミックは尋ね，‘spasm’を思いついたトマスは悦に入る。妻殺しの動機をメアリーが知りたがると，ミックは，7年間一貫して主張してきたように，自分はウナを殺してはいない，この自白調書は今夜犯したばかりの殺人に関するものだ，と言って，書き上げた調書をトマスに渡す。急いで目を通したトマスは，弟マーティンならレイと一緒にディスコにいた，と取り合わないが，1マイル先の自分の車のフロントグラスに死体がぶら下がっている，というミックの言葉に逆上してとびかかり，椅子からなぎ倒して，床の上でミックの首を締める。ところがそこへ，当のマーティンが，額の中央にあいた傷から血を滴らせながら入ってきて，なにをやってるんだ，と声をかける。一瞬，床の上のミックとトマスは凍りつき，唖然としてマーティンを凝視するが，弟の命に別条がないと悟ったトマスは，木槌による傷害罪で逮捕すべく，手錠を取り出す。ところがマーティンは，この傷は自分の酔払い運転のせいだ，と言い出すのでトマスは混乱，このすきにミックは先の供述調書をつかんで火中に投じる。トマスが気づいたときはすでに灰になっており，殺人未遂を立証するために弟を本署へ連れて行き，そこで被害調書をとろうと促す。しかし，マーティンはこれを拒み，問題の頭蓋骨を掘り出した主犯は，他ならぬ兄トマスであり，しかも頭蓋骨に穴をあけている現場を翌日に目撃した，と爆弾発言を行う。死んだ奥さんの所持品を盗むのは良くないし，10ポンドはすると兄が口止め料に確約した例の埋葬品のロケットは，実際には質屋で1ポンドにもならぬがらくただった，とそのロケットをミックに渡す。さらに，交通安全指導が得意なだけで，口の回りがチョコだらけの万引き少年すら逮捕できぬ無能警官と，村中の人がトマスを虚仮（こけ）にしていると侮辱すると，彼はマーティンの頭を木槌で二度殴りつけ，床に倒す。ミックはトマスの両腕をつかんで押しとどめる。「もう昇進の見込みはないな」とトマスは観念して呟き，弟の頬

や血まみれの頭をやさしく撫ぜて謝り，いつかこのお返しはする，と捨て台詞をミックに残して退場。メアリーがハンカチを孫の頭に押し当てると，痛さでマーティンは悲鳴をあげ，病院での治療を勧めるミックに，病院は住む家のない同性愛者たちの溜まり場だ，と嫌がる。頭蓋骨を抱えたミックに，奥さんは随分様変わりしたかい，と無遠慮な問いを発し，今日はいろいろ楽しかったが，遺骨粉砕が最高だった，とメアリーの前でわざと暴露するので，自家用車の損害賠償を請求する，とミックも言い返し，マーティンは脳振蕩による眩暈に耐えながら，なんとか壁伝いに歩いて退場。遺骨処理やマーティンの怪我の件でミックが嘘をついたとメアリーはなじるが，遺骨粉砕は今度が初めてのことであり，マーティン襲撃についてはすでに供述調書にも書いたから嘘ではない，と彼は弁明する。ウナの死因に関して依然として疑念を隠さないメアリーに向かって，結婚生活で一度たりとも手を上げたことはなく，「見たわよ」と，いくらかまをかけられようとも自分は潔白だ，指一つ妻には触れなかった，と断言するミック。メアリーは，地獄落ちすればいい，と言い残して立ち去る。ミックは形見のロケットを見やり，ウナの頭蓋骨を抱えてじっと見つめ，額の穴を触り，頭蓋骨に頬ずりをして，やさしくキスをする。ゆっくりと溶暗。（4場）

この作品では，どうやら＜妻殺し＞という凶悪犯罪は噂に過ぎず，現実には実行されていないらしい。だが，4場の急展開からわかるように，それ以外の犯行，つまり現役警官による証拠捏造と冤罪の不祥事，さらにはミックによる殺人未遂（本人は殺人を確信していた）の罪は歴然とした事実である。なぜ，トマスがミックにそれほどまでの悪意を抱いていたのかはテキストからは不詳だが，日頃，村人から軽侮されてきたトマスにとっては，フィクションで活躍する名刑事よろしく，見事に殺人犯を検挙する手柄をあげて見返すことが不可欠な偉業で，ミックを利用したという推測は考えられるだろう。

3)『孤独な西部』（全7場）

リーナン村の古い農家の台所兼居間が舞台。父親の葬儀を終えて，コナー家の兄弟の兄コウルマン（Coleman Conor）と35歳のウェルシュ神父（Father Welsh）が戻ってくる。家計は弟ヴァレン（Valene）が掌握し，弔問客にまともなもてなしもできないし，世話を焼いてくれる結婚相手もいない，とコウルマンは嘆く。彼がかつて熱愛していた赤毛の女性アリソン（Alison O'Hoolihan）は鉛筆を喉に刺す事故を起こし，その治療に当たった医者と婚約してしまった。やがてヴァレンも帰宅し，ファイバーグラス製の小立像（figurine）を棚に並べる。葬儀に参列していた警官トム・ハンロン（Tom Hanlon）と故人は知り合いだったのかと神父が訊くと，かつて尼僧に暴言を浴びせたことで数度，亡父はトムに逮捕され，トムの弟マーティンが自分の飼犬ラッシー（Lassie）の両耳を切断して殺したという噂だったので，ハンロン兄弟を憎んでいる，とヴァレン。（この愛犬の額入り写真

は簞笥の上に飾られている。その噂には証拠がない，とコウルマンが抗弁するのは７場への大事な伏線。）ヴァレンは自分の所有物であることを示す頭文字‘V’を小立像に記入するフェルト・ペンをとりに自室に戻る。２件の未解決殺人事件を教区内で発生させた自分の不徳と無能をウェルシュ神父が嘆くと，華奢で酒好きでカトリック信仰に疑念を抱いていることを別にすれば，少年への性的虐待もしない立派な神父だ，とコウルマンは妙な理屈でかばい，ちょうど自分がつまづいて銃が暴発したために父親を死なせてしまったのと同様に，それらも殺人事件ではなく事故なのだ，幸い，たまたま自分の場合は弟ヴァレンが現場に居合わせたので証人となってくれた，と語る。ヴァレンがフェルト・ペンを持って戻る。神父は小学生（12歳未満）女子サッカー・チームの監督でもあり，コノート地区準決勝進出まで果たしたが，４試合で10枚のレッド・カードを貰う乱暴チームで，少女一人はいまだに負傷入院中だと嘆く。そこへ，17歳の美少女ガーリーン（Girleen）が密売酒の宅配販売に来る。途中で郵便配達人からヴァレン宛ての手紙を預った彼女は，郵便屋に限らずEC中の男が私のパンティを穿きたがっているけど，安月給じゃ相手にしないわ，神父さんの給料はお幾らくらい？と猥談で神父をからかう。ヴァレンはガーリーンから酒を２本買うが，代金をごまかそうとして彼女から罵られる。受け取った手紙に同封された小切手（父親の死亡保険金と思われる）を，ヴァレンがコウルマンの鼻先に執拗に見せびらかすので，取っ組合いの喧嘩となり，仲裁に入った神父まで巻き添えで脛を蹴られる。実父の葬儀日に兄弟喧嘩，若い娘が酒を密売し，殺人犯も捕まらぬ，と落ち込んで家路につく神父をガーリーンが送る。残された兄弟は，もし親父の死が事故ではなく故殺だという事実がばれたら，考えすぎの神父はもっと落ち込むだろうな，と語り合う。（１場）

翌日の夕方。新品の大型料理用レンジ（stove）が据えつけられて，正面に‘V’の大書。コウルマンが酒を手に女性雑誌を読んでいると，ヴァレンが帰宅し，留守中にレンジが無断で使われた形跡がないか，点検する。このガスレンジは300ポンドで自分が購入した物で兄には絶対に使用させない，レンジだけでなく，小立像も銃も椅子もテーブルも食器棚も床までもすべて自分の物であり，使うには許可を得ろ，と言う。床に触れないためには「空中浮揚するクロンボ」（levitating darkies）にでもなるしかない，と兄が言えば，クロンボじゃなく「パキスタン人」（Paki-men）だ，と反論し，新たに買ってきた小立像２体を並べる。別に買ったスナック菓子（Tayto）を彼が取り出すと，まずい17ペンスの安物じゃなく，別の商品（McCoys, Ripples）にしろ，とコウルマン。兄が手にした酒を見つけて自分の酒を盗まれたと思ったヴァレンは，預けておいた住宅保険振込金を着服された，と疑うが，ちゃんと受取人Duffyの署名がある，とコウルマンは示し，ただで酒を１本貰う代わりにガーリーンに自分の下半身を触らせたのだ，と嘯く。彼女がそんな真似をするわけがない，とヴァレンが興奮する間に，コウルマンはスナック菓子を勝手に１袋食べ始め，怒ったヴァレンは17ペンス払え，と命令する。コウルマンが２度に渡って10ペンス硬貨を激しくテーブルに叩きつけ，釣りはいい，と怒鳴ると，お情けはいらない，と弟も負けじと３ペンスを握らせる。その小銭を兄は弟の後頭部めがけて投げつけ，またしても取っ組合いの喧嘩になる。そこへ，やや酔ったウェルシュ神父が立ち寄り，

トム・ハンロンが入水自殺したニュースを伝える。目撃した子どもの話では，桟橋のベンチに腰掛けてビールを飲んでいたが，飲み干すと湖の中にずんずん歩いて行ったのだという。訃報を聞いたコウルマンは，他の警官同様，自惚れた奴で気に入らなかった，となんの同情も示さない。この日ずっとガーリーンが女子サッカーのユニフォーム洗濯の手伝いをしていたと神父が言うと，艶っぽい作り話がばれてバツの悪いコウルマンは自室に引っ込む。ヴァレンに罵られると一瞬，部屋から飛び出してガスレンジを蹴とばし，また部屋に逃げ込み，立像やレンジの'V'は「童貞」(Virgin) の頭文字だとからかう。このやり取りをそばで聞いていた神父は涙ぐみ，幼馴染みの親友が非業の死を遂げたというのに顔色ひとつ変えぬばかりか，スナック菓子やらレンジのことで口論していると嘆き，相も変わらずヴァレンが無神経にレンジや金銭の話を続けるので，とうとう怒り出す。神父は砂浜に置いてあるトムの溺死体を遺族宅へ運ぶようにヴァレンに依頼して，立ち去る。ヴァレンは外出の旨を壁越しにコウルマンに伝えるが，体育の時間に俺の腕立て伏せを嗤いやがった奴だ，と言って同行を拒否する。やがて部屋から出てきたコウルマンは弟の不在を確かめ，ガスレンジを最強温度に設定し，弟の小立像を残らず大皿に載せてレンジに収め，扉を閉める。そして上着をはおり，髪を梳かして家を出ていく。(2場)

数時間後，ヴァレンと神父が帰宅。遺体が運びこまれた親族の悲嘆の様子を語る。とくに故人の弟マーティンが激しく嗚咽していたが，愛犬を惨殺した奴だからいい気味だ，俺なら兄貴が死ねば大宴会だ，とヴァレン。神父は自殺したトムの胸中を思いやり，人生の喜び(旅やテレビ観戦，人から愛される希望など)と，冷たい水中の死とを両天秤にかけたうえで，健康や友人や暮らし向きにも恵まれながら38歳の若さで，なぜ死を選んだのか，いや実際には彼を思いとどまらせる友人とやらはいなかったし，自分もまたパブでひとり酔い潰れていた，自殺者はカトリックの教えでは地獄落ちで，一切の救済もないのに，と語る。その神学上の事実が初耳のヴァレンは，テレビドラマ『別名スミスとジョーンズ』の自殺者も該当するのか，と尋ねると，何十人殺そうと悔い改めれば天国へ行けるが，自分を殺せば地獄へ直行だ，と神父は答え，酒を少し飲ませてくれとヴァレンに頼む。けちなヴァレンは，檀家信徒の一人が自殺した晩に神父が酒など飲んでいいのか，と辛辣に断る。やがて部屋に漂う異臭に神父は気がつき，遅刻して手伝いに来たコウルマンの姿が見えないこと(彼は故人の母親に向かって，ヴォーロヴァン・パイ (vol-au-vent) は参列者にふるまわれるのか，と嫌がらせのようにしつこく念を押していたらしい)を指摘すると，ヴァレンははっとし，聖母マリアの小立像の姿が見えないのに気づいてあちこち探し回るうちに，熱くなっていたレンジに手を触れて火傷する。レンジから取り出した大皿には，どろどろに溶解したプラスティックの塊。ヴァレンは激昂して銃をつかみ，兄を殺してやる，と叫ぶ。無生物にすぎぬモノのせいで，血を分けた実の兄を殺めてはならない，と神父は宥めるが，だったら血を分けた実の父を殺してもいいのか，父親は事故死ではなく，髪形を馬鹿にされた兄が射殺したのであり，父親への遺恨は，8歳の時に愛用の電動模型レーシング・カー (Scalectrix[14]) を踏みつけられた憎悪に溯るのだ，と真相を告白する。その瞬間，「たしかにあ

のミニカーは好きだったな，ヘッドランプが光っていた」と言ってコウルマンが入ってくる。父親殺しは嘘だろう，と必死に尋ねる神父に，彼は，ちゃんときれいに梳かしていた髪を＜酔払った子どもの髪＞と馬鹿にされたのが許せなかったから殺した，と平然と答える。しかもその後，この殺人を事故と証言するように弟に依頼し，その口止め料として，父親が残す遺産をすべて譲るという契約を結んだ共同謀議も暴露する。ずっと兄に銃口を向けていたヴァレンはついに引き金を引くが，コウルマンがすでに弾薬を抜き取っていて，空砲だった。弾薬を奪い返そうとするヴァレンとコウルマンがまたしても取っ組みあっている間に，深く絶望したウェルシュ神父は，熱く溶けたプラスティックの中に両手を漬けていく自傷行為に走り，悲鳴をあげて走り去る。だが，いかれた奴，と神父を罵るだけで，コウルマンは弾丸をヴァレンの顔に投げつけて逃げ去り，ヴァレンは股間をぽりぽりと掻いて，その指の匂いを嗅ぐのみ。（3場）

湖畔のベンチにビール片手に両手を包帯したウェルシュ神父。ガーリーンが近づき，トムの葬儀の折の説教が感動的だった，と声をかけるが，いつも彼女からからかわれている神父は愛想がよくない。コウルマンによる父親殺しの噂は耳にしていたが，故人は，愛猫のイーモン（Eamonn）を蹴とばすような陰険な人だったから自業自得，とガーリーン。リーナン村を今夜，立ち去る決意を固め，なにか手を打たぬとあの兄弟はきっと殺し合う，と憂慮する神父は，認(したた)めた手紙を届けるようにガーリーンに託す。お互いのファースト・ネームを初めて知って，ロドリック（Roderick），メアリー（Mary）がそれぞれに不似合いなひどい名前だと笑い合う。かつて3人の入水自殺者が出たこの湖畔にいても，少しも恐怖心を感じないのは，少なくとも生きていれば，幸せになれる可能性はあり，死者たちもそれを応援してくれる気がするからだと，ガーリーンはしみじみと語り，神父の頬にキスし，抱き合う。感傷的な気分の高揚を恥じるかのように，「まさか手紙の中身は避妊具だらけってことはないでしょうね，獣姦でもしない限りあの兄弟には不要よ」とガーリーンは際どい冗談にして紛らし，兄への当てつけに，今度は火でも溶けない陶器の小立像をヴァレンが収集し始めたこと，＜サッカー試合で少女，頭部切断＞の新聞見出しが派手に踊るかもよ，必ず新しい住所からお便り頂戴ね，と念を押して，ガーリーンは神父と別れる。残された神父は静かに座ったまま，沈思黙考を続ける。（4場）

暗闇の中，書き上げた手紙を神父が早口で朗読する。コウルマンに対しては，怨恨から衝動的に父親を殺した罪を自覚して許しを乞うよう，ヴァレンに対しては殺人と同様に罪深い，金銭に目が眩んだ偽証の非を諭したうえで，かつてのように仲のよい兄弟に和解することを誠実に勧める趣旨。この際，積年の恨みを洗いざらい列挙して腹蔵なく話し合い，そのうえでお互いに許し合うことはできないだろうか？少なくとも試してみる価値はあるだろうし，誰のためでなく，この私（神父）のためにやってみて貰えないだろうか？賭率6万4千倍の不利な歩合でも，兄弟のどこかに情愛の念が残っていることに自分は賭けたいのだ，と切々と訴える。（5場）

ヴァレンの家。‘V’印のついた新品の陶器の小立像が棚にならんでいる。2場と同じように，コウ

ルマンが座って酒を飲んでいるところへヴァレンが帰宅し，留守中に兄が手を触れていないか点検する。新たに買い込んだ小立像で，現在46体。相変わらずけちなヴァレンは，自分の女性雑誌を兄が勝手に読むことや，スナック菓子を食べることを許そうとはしない。怒ったコウルマンは菓子を袋入りのまま粉々に砕き，別の一袋を開けて食べようとする。そこへガーリーンが登場。すきをついてヴァレンがコウルマンにとびかかり，兄弟はまた取っ組み合いとなる。しかし，彼女が静かに肉切り包丁を持ち出してコウルマンの首筋に当てるので，二人は怯えて離れる。ガーリーンは神父から預かった手紙を卓上に置き，二人は読み始めるが，コウルマンはすぐに飽きる。ガーリーンは通販で今朝届いたばかりのハート型ペンダントの鎖をナイフで引きちぎり，神父が昨夜，トムと同じ場所で入水自殺を遂げたことを伝える。密造酒を売っていたのも神父にこのペンダントの贈物をしたいがためだったのに，遺言となった手紙の中には私のことなど，ただの一言も触れられていない，と嘆いて立ち去る。驚いたコウルマンは神父の手紙を改めて読み直し，彼の和解勧告の遺言に従うことに兄弟の意見が初めて一致する。（6場）

ウェルシュ神父の葬儀を終えた兄弟が喪服姿で帰宅。神父の手紙は十字架の足にピンで留めてある。葬儀のご馳走をビニール袋にごっそり持ち帰ったコウルマンは弟に分配，ヴァレンも兄に自分の酒を勧める。子ども時代にベッドの間に毛布テントを張って一緒にジャム・サンドを食べたよなあ，とコウルマンは懐かしむが，それはどうやらミック・ダウド相手の記憶違いで，ヴァレンの方は，誕生日に縛られて兄の口から垂れる唾液を目の中に落とされた忌まわしい思い出を指摘する。このあと二人は，いわば＜謝罪合戦＞のようにかつての秘密の悪事を告白しては詫びを入れるゲームを交互に繰り返す。ヴァレンは唾液の仕返しに，大きな石を就寝中の兄の頭に落としたことを詫び，コウルマンは父親殺しを，ヴァレンは偽証と引換えの遺産没収を詫び，兄が刑務所に入れば自分だけが家に取り残されるのが嫌だったから偽証したのであり，今日以降は，この家の物は二人で折半しようと提案し，ぎこちなく握手を交わす。しかし，なおも謝罪ゲームは続き，兄が置き忘れた西部劇の駅馬車の模型を海へ捨てたこと，兄のデート相手からの映画鑑賞の誘いの伝言を伝えなかったこと，兄のビールの中に自分の小便を混ぜ，そのせいか細菌性扁桃腺炎で入院騒ぎになったことをヴァレンが告白すれば，コウルマンの方も，唾液はわざと目を狙って落としたこと，ゲームに必要な付属品のビー玉を白鳥いじめに浪費したこと，弟の『スパイダーマン』の漫画本を暖炉で燃やし，知恵遅れの子どものせいにしたこと，亡き母親の悪口を言っていたと嘘をついて，ある少年を扇動して弟を殴らせたこと，弟の酒を10年来，毎週盗み飲みしては水増ししていたことを告白しあう。だが，兄が熱愛していたアリソンの喉に鉛筆を刺したのは実は自分だった，とヴァレンが暴露すると緊張が高まり，コウルマンは，去年，弟の愛犬ラッシーを殺したのはマーティンでなく自分だ，と言う。こればかりは信じようとしないヴァレンに，コウルマンは自室に引き返し，茶色の紙袋を持ってきて，切り取られた犬の片耳をテーブルに，もう片耳を愕然とする弟の頭上に載せる。ヴァレンは食器棚から肉切り包丁を，コウルマンはレンジの上から銃をつかんで睨み合い，ヴァレンはゆっくりと兄に近づき，両者

は刺し違いになりかねないほど密着する。だが，コウルマンが弟の胸に押し当てた銃口を一転，ガスレンジに向け直すと，ヴァレンは躊躇し，やがて包丁をテーブルに置く。(彼にとっては自分の命よりもガスレンジが大事なのだ！)銃の＜事故＞暴発をヴァレンが心配すると，コウルマンは不敵な様子で立上がり，レンジの左右に1発ずつ銃を撃ち込んで破壊し，さらには陶器の小立像を銃身で叩き割って粉々にする。もう弾薬は尽きた，と判断したヴァレンは再び肉切り包丁をつかむが，コウルマンは即座に弾薬を入れ替えたような動作をする。長い睨み合いが続き，やがてヴァレンは再度断念して，包丁を引出しにしまう。二人はいったん和解し，レンジや小立像の損害は住宅保険金で補塡できるとヴァレンがとりなすと，実は振込金は着服して呑み代に消え，払っちゃいない，とコウルマン。ヴァレンは銃に突進，コウルマンは家から逃げ出す。確かめると銃には弾薬が装塡されており，ヴァレンは抜きとる。神父の手紙をマッチで燃やしはじめるが，すぐに火を消し，また元の位置に戻す。そして上着を着て，兄が待っているだろうパブへ出ていくヴァレン。十字架と神父の手紙に光が揺らめき，溶暗。(7場)

腐れ縁の兄弟が展開する壮絶な愛憎劇である。兄弟の確執と言えば，聖書の「カインとアベル」の話(『創世記』4章)やイサクの息子たちの「エサウとヤコブ」の話(『創世記』27章)が思い浮かぶが，前者のように，嫉妬した兄による弟殺しの結末を迎えていないだけでも幸いなのかもしれない。殺し合う極限まで幾度となく達しながらかろうじて踏みとどまっているのは，人間の魂の救済における，著者マクドナの一縷の希望の表明かもしれない。だが，シング(J.M.Synge, 1871-1909)の『西の国の伊達男』(*The Playboy of the Western World,* 1907)では未遂事件として棚上げされた＜父親殺し＞が，この芝居では現実に実行に移されたこと，しかも些細なきっかけで起きた衝動殺人であると同時に，少年時代の怨恨が根底にあったことなどを考え合わせると，きわめて現代的な犯罪といえるだろう。7場で兄弟が繰り広げる謝罪の応酬は，いかなる罪でも告白すれば許される，という教義に基づくカトリックの告解の儀式を痛烈に批判するものであろう。

4)『イニシュマーンの跛(びっこ)[15]』(＜アラン諸島三部作＞の第1作)

1934年頃のアラン諸島中央のイニシュマーン島の小さな田舎店。ともに60代半ばのアイリーン(Eileen Osbourne)とケイト(Kate)姉妹は，医者に胸を診察してもらいに出かけた17,8歳のビリー(Billy)の帰りが遅いのでやきもきしている。片腕と片脚が不自由で，風采もあまり冴えない彼の将来の縁談について二人は案じる。そこへ，やはり60代半ばのジョニーパティーンマイク[16](Johnnypateenmike)が登場，島のゴシップ3題を聞かせる。レタモアの男が兄弟の聖書を盗んで海中投棄した話，ジャック(Jack Ellery)の鷲鳥がパット(Pat Brennan)の猫の尻尾に噛みつき，飼主

ジャックが詫びないので，この親友たちの関係が気まずくなった話。このときようやくビリーが帰宅し，話に水を差されて怒るジョニーだが，3番目のニュース——アメリカ人映画監督ロバート・フラハティのロケ隊の一行[17]が映画『アランの男』の撮影に隣のイニシュモア島に来ているという情報を告げる。情報提供代として好物のオムレツ用卵を要求するが，あいにくこの日は産卵がなく，行商人の卵はふしだら娘(スリッピー)ヘレンが落として割ってしまって取り置きもない。代わりに要求した赤身のベーコンを断られたジョニーは腹を立てて出ていくが，再び舞い戻ってきて豆の缶詰をせしめる。ビリーは珍しく，映画の話に興味を示し，考えこむ。(1場)

16歳の少年バートリー(Bartley)が店にきて，アメリカのお菓子MintiosやYalla-mallow, Chocky-top Drops, Fripple-Frapplesは置いてないのかとしつこくアイリーンに尋ねるが，陳列現品のみだと答える。バートリーは，まるで「朝三暮四」を地で行くような滑稽な台詞(18)を含め，お菓子への異常な執着を示す。1歳年上(17歳)の姉ヘレン(Helen)が乱暴な言葉使いで登場。卵は落としたのでなく，聖歌練習のときにお尻を触ってきたバラット神父(Father Barrattt)の顔にぶつけたのだと言う。ヘレンたちは映画に出演するためにイニシュモア島に渡る計画で，神父に痴漢されるほど可愛いんだから映画に出るのは簡単と豪語するヘレンに，一人っきりでチビだから狙われたのさ，と弟。両親は荒海で転覆事故死したのだとビリーは主張するが，石を詰めた袋を体に巻きつけての入水自殺，とジョニーから聞いたとヘレンは言い，つまらない横槍を入れた弟の腹をなぐりつける。ビリーは，両親の溺死以後は恐怖で海に近づかなくなり，100ポンド近い死亡保険金が支払われたが自分の医療費でとうに消えたことなどを語る。ヘレンの計画では，イニシュモア島へはバビーボビー・ベネット(Babbybobby Bennett)にキスか手を握らせてやって舟に乗せてもらう予定。ビリーが自分も映画に出演したいと言いだすと，ヘレンは激しく笑って立ち去る。店の奥から戻ってきたアイリーンからは，この島を離れようなんて考えないで，と諭され，ひとりぜいぜい咳き込むビリー。(2場)

夜の浜辺。30代初めのハンサムで男らしいバビーボビーが小舟(curragh)を修繕している。少し酔ったジョニーがそれを眺め，旅先をそれとなく聞き出そうとするが，直に質問しろと言われ，プライドを傷つけられて去っていく。足を引きずってビリーが登場。ケイトが石に話しかける姿を見たボビーは，ケイトたちを変わり者呼ばわりし，牛に石を投げると退屈凌ぎになるぞ，勧める。隣島にヘレンたちを乗せていくのか，ビリーが確かめると，ヘレンがおっかないので了解しただけ，お礼のキス云々も彼女の提案だ，と答える。ビリーが自分も同船させてほしいと頼むと，以前，びっこを乗せた船が沈んだことがあって縁起が悪い，と断る。それは身障者への偏見にすぎず，映画キャストにびっこ役が必要かもしれない，とビリーは反論。ボビーは昔見た，両手両腕のない有色人種の出る映画が怖かった，と話をはぐらかし，1，2年先なら引き受けるかも，と逃げを打つ。ビリーはマクシャリー(McSharry)医師から昨日貰った手紙を取り出して，バビーに読ませる。中身を読んで表情を曇らせたボビーは，明朝9時に同船させることを約束する。そこへ，ジョニーがいきなり出てきて，自分にも手紙を読ませないと，いままで盗み聞きした隣島行きの計画を村中に言い触らすと，脅す。

ボビーはジョニーの髪をつかんで腕をひねり，地面に腹這いにさせて踏みつけ，ビリーに持ってこさせた石で頭を叩き割るぞ，と脅して，絶対に他言しないという言質をとって，ジョニーを追い払う。しかし約束を破る可能性もあるから，出航を8時に繰り上げることをボビーは提案。実は，ボビーの妻アニーもビリーと同じく結核を病んで亡くなっており，余命1年の猶予があったので彼女と一緒にいてやれたが，余命3か月と診断されたビリーは今年の夏さえ迎えられないかもしれない。ビリーはボビーに，<びっこのビリー>でなく単に<ビリー>とこれからは呼んでほしいと頼み，1度うっかり忘れはするが，ボビーは彼を<ビリー>と呼び直し，言い間違いを詫びる。ビリーが去ったあと，ボビーは波に打ち上げられた聖書を拾い上げ，また海の中に放り捨て，船の修理を始める。(3場)

ジョニーの家の寝室。90歳の老母マミー・オドゥーガル（Mammy O'Dougal）の往診にマクシャリー医師が訪れていて，お酒は控えていますか，と問診する。当初，<黒ビール一杯くらい>の返答が，ときにはさらにウィスキー2杯，それも朝食時，そして密造酒を特別な折(金，土，日曜の週末3日間)に，と返答はエスカレート。母親を肝臓疾患で死なせたくないなら断酒を，と医師はジョニーに注意するが，65年前（厳密には63年前のはず）の1871年に夫ドナル（Donal）が鱶に食いちぎられて死んでからというもの，ずっと夫の後を追おうと深酒に走ってきたのになんともないのだから，今更心配しても仕方ない，とジョニー。仮病の往診依頼は医者を招く口実にすぎず，ビリーの病状を聞き出すのが彼の魂胆だったが，主治医としての守秘義務を盾に医者は無視する。ジョニーは，<脳腫瘍，ポリオ，結核，癌>と病名を列挙して医者の反応を窺うが，生まれつきの障害以外はどこも悪くない，と医者は答え，立ち去りかける。今朝ビリーたちが映画出演のために隣島に出航したことをジョニーが伝えると，昨日すでに映画撮影は終了し，今日は撤去作業のはず，と医師は答えて，ジョニーの情報の不正確さを示唆し，ビリーの体はどこも悪くない，と念を押して立ち去る。ジョニーは，ジャックの鷲鳥とパットの猫が先週来，ともに行方不明になった続報を母親に教え，耳なしの奇形羊誕生の新聞記事を読んで情報収集に余念がない。マミーはビリーの身の上を哀れみ，夫の死後，息子ジョニーが酒に金を浪費し，まずいビート入りパエリャ料理を毎週拵える，と不平を漏らす。お互いに相手が早く死ねばいい，尻の贅肉を切らないと棺桶に収まらないぞ，などと悪口を言い合った後，ジョニーは，ドイツで変な口髭の男[ヒトラー]の台頭を報じる新聞記事を紹介，コネマラにもドイツ人（不詳[18]）が住んでいるのはアイルランド人の親切さが世界中の評判だからだ，と自慢し，ビリーの病気はきっと癌だな，と推測する。(4場)

ビリーが隣島から戻らず，なんの消息もないのでケイトとアイリーンの心配は募るばかり。困ったときに石に話しかける奇妙な癖を指摘されたケイトは，入荷した売り物の菓子をアイリーンがつまみ食いで平らげたことを非難し，そもそもビリーを乗船させたボビーの責任だから殴ってやりたい，と憤る。ヘレンが留守のお陰で大量に買い込めた卵を見て，ビリーはヘレンに好意を寄せているけれど，きっと悲しい結末を迎えるよ，と姉妹は憂える。そこへジョニーが登場し，例によってニュース

3題を報じる。新聞受売りの耳のない羊の話，鵞鳥と猫がともに死体で発見され，飼主同士の反目が露になったことを告げ，いくら酒を飲ませてもお袋がくたばらない，と脇道へ逸れて聞き手をじらしたあと，ボビーの舟で戻ってきたのはヘレンとバートリーの二人だけで，ビリーの姿は影も形もなかった，と伝え，卵6個をせしめて立ち去る。きっとビリーは死んだのよ，と嘆く二人のもとへ，ボビーがやってきて，ビリーから預かった手紙を渡し，以下のような事情説明を誠実に行う。——ビリーを連れ帰る責任は感じたが，ビリーは跛の端役が出演する映画のスクリーン・テストを受けるために，2，3か月の予定でアメリカへ渡ったこと，ケイトたちとの暮らしも大事だといくら言い聞かせても，これは自分の人生だから，というもっともな主張には逆らえなかったこと。——悪筆の手紙には，俳優業でうまくいけば多忙になるので夏以降，音信不通かもしれないが，亡き両親やケイトたちのために頑張るから心配しないで，という内容が書かれていた。これまで面倒になった恩義を忘れてビリーが私たちを捨てて行った，と二人は泣き悲しみ，アイリーンは非常時に備えてとっておいた菓子を食べて気を紛らす。跛のビリーにもう一度会いたい，と二人が呟いて暗転。（5場）

4か月後の夏。教会で上映中の『アランの男』のチラシが壁に貼ってある。菓子の在庫を調べに店の奥に引っ込んだケイトをバートリーが所在なげに待っているところへ，姉ヘレンが卵をたくさん抱えて登場。卵屋の向こう脛を蹴とばしたために，今日は自分が行商の代役を果たしていること，暴行をはたらいた原因は，例の鵞鳥と猫殺しの嫌疑をかけられたためで，たしかに，自分が足蹴で殺した犯人に違いないのだけど，その事実が広まると，（おそらくそれぞれの飼主から）鵞鳥8シリング，猫10シリングの殺害報酬が貰えなくなる，とヘレン。ビリーの消息をカウンターの石にケイトが尋ね，答えを聞こうと耳に押し当てている現場を目撃したとバートリーが知らせると，失踪時に余命3か月の身だったビリーはもうアメリカで死んでいるはず，と二人に教えてやるのが筋で，本来，美少女の私が貰うはずだった役を横取りし，弟に送ると約束したアメリカのお菓子も梨のつぶて，とヘレン。その弟がビリーを擁護する口振りをしたのに腹を立てたヘレンは，弟の腕をつねったり絞ったりした挙句，生卵を彼の額にぶつけて割る。卵黄を垂らしたまま，バートリーは，ボビーも姉が怖くてお礼のキスを遠慮した，などと必死に抗弁すると，ヘレンは＜イングランド対アイルランド＞のゲームをしようと誘い，イングランド役の彼女はアイルランド役の弟の額に次々と3個の生卵をぶつけて割り，明日見に行くつもりの映画『アランの男』のスクリーンにも卵をぶつけてやるわ，ダサイ男が釣りをするよりも，本当は私が主演して『アランの少女』，それも『アランの美少女』にもできたのに，といきまく。そして誰も店頭に顔を出さないので，弟に卵の代金(自分が割った4個分も含めて！)を集金し，卵屋に届けるように命じて去っていく。やがてぼんやりとした様子のケイトが出てきて，バートリーに用件をあらためて尋ねる始末。彼の注文した菓子の在庫確認などすっかり忘れて，上の空状態のケイトは，例の悩み相談用の石をつかんで，また奥へ引っ込む。怒ったバートリーはカウンターに置いてある卵を木槌で残らず叩きつぶして，店を出ていく。（6場）

ハリウッドの木賃宿の椅子に座り，喘息をもらして震えるビリー。亡き母に向かっての独白が続

く。アイルランド人であることの誇りを奮い起こす台詞を唱えつつ，鉄道建設の肉体作業で体は疲弊し，打ち明けられぬ恋に心は張り裂け，天国はアイルランドより美しいと聞いたけど，母さんの美しさにはかなわないよ，跛の少年は天国に入れて貰えるのかな，と語りかけ，大丈夫，眠るだけだから，とベッドに横になる。喘息はさらにひどくなり，急に喘いだかと思うと，目を閉じてじっと動かなくなる。溶暗。（7場）

『アランの男』上映中の教会のホール。ボビー，酒を手にしたマミー，ジョニー，ヘレン，バートリー，アイリーン，ケイトが薄暗がりの中で映画の終盤を見ている。お袋の貯金を＜短期間＞といって借りてから20年になる，とジョニー。鱶はアイルランド沖には滅多にいないはずだが，とバートリー。長々と続く鱶捕獲の映像に退屈し，自分なら一撃でしとめる，とヘレン。鱶叩きは猫殺しよりもむつかしいかな，と姉に訊いたバートリーの言葉をすかさず手帳にメモし，羊の脇肉分の情報価値があるとほくそ笑むジョニーに，ばらしたら首の骨をへし折るわよ，とすごむヘレン。映画のなかの女を狙ってすでに5個も卵を投げていたヘレンは，また鱶めがけて卵を投げつける。こうして映画そっちのけの口論が7人の間で交わされるうちに，うっかりジョニーが，ビリーが結核だったことを口を滑らし，アイリーンは愕然とする。ボビーは口の軽いジョニーを教会の外へ引きずり出す。事情説明を求めるアイリーンに，マミーが一部始終を正確に伝え，アイリーンは涙ぐむ。映画が終了し，映写幕（スクリーン）が白くなると，そこにはビリーの影絵が写るが，ケイトだけが気づいてじっと見つめる。ヘレンとマミーは退場し，バートリーもビリーの影絵に気がつく。ケイトが映写幕（スクリーン）をめくると，元気な姿のビリーがいて，映画が終わるまで邪魔したくなかったんだ，と声をかける。ケイトは石を落としてビリーを抱擁，涙のアイリーンもようやくビリーに気づいて呆然とする。実は，舟に乗せてもらうために，マクシャリー医師の手紙に見せかけた偽手紙を自分で書いてボビーをだましたのだ，とビリーは真相を告白する。ハリウッドではテストに合格し，役を貰ったものの，時代錯誤の台詞や歌（'Croppy Boy'[19]）にあきれ果て，愛する人々の待つイニシュマーン島へ帰ってきたのだ，とビリーは語る。バートリーはアメリカの菓子や叔母のことばかりを質問して退場し，「アイルランドもアメリカもおんなじだね，髭を生やした太ったおんなばかり」と生意気な口をきくビリーの頭をアイリーンはなぐり，友だちに御土産の菓子を買う暇があるなら，どうして心配している私たちに手紙の一本も寄越さなかった，と叱りつける。ビリーは黙って頭を下げて謝り，気を取り直したアイリーンはお祝いの食事の準備に急いで帰る。映写幕をぼんやり見つめているうちに，騙されたボビーが姿を現し，ビリーは釈明を始め，許しを請う。——ハリウッドの誘いを断ったのは嘘で，ホテルで何時間も練習して演技力には自信があったのだけど，＜演技の下手な跛よりも，跛の演技がうまくやれる奴のほうがいい＞という理由で不採用になったこと，人々から嘲笑され，跛をひいての医者通いと退屈な読書以外になにもない生活，村の跛のみなしごの生活（もっとも，表には見えないだけで，心が＜かたわ＞の連中はこの辺りにはたくさんいるけれど）にどうしても終止符を打ちたかったこと，村人の中でボビーだけは心の優しい人物だと見込み，亡き奥さんと同じ病名を騙ったのは大変すまないと思うけれ

ど，やむを得なかった…――じっと聞いていたボビーはゆっくりとビリーに近づくと，袖から長い鉛管を取り出し，ビリーの頭めがけて降り下ろす。その瞬間，暗転し，ビリーの苦痛の悲鳴と繰り返し叩きつける鉛管の音が鳴り響く。（8場）

夕方遅い時間。店内でマクシャリー医師がビリーの頭と顔の傷の手当てをしている。<ビリー帰島，ボビー逮捕，ジム・フィネガンのふしだら娘の修道院入り>の3大ニュースでジョニーが島中を跳び回っている，とケイトたちは噂する。ビリーは手紙の捏造の件で医者に陳謝する。ケイトたちを退席させたあと，ビリーは医者に自分の両親のことを尋ねる。父親は喧嘩の絶えぬ酔払いで，母親は気立てはいいが，噂と異なり不器量で口臭がひどく，ビリーの障害は，妊娠中に夫から暴行を受けたからではなく，単に病気のせいだ，と医者は答える。ビリーは咳き込み，聴診器で診察すると，どうやら本当に結核らしい，と診断される。戸口で立ち聞きしていたジョニーがこれを聞きつけ，早速広めようとするのを，ビリーは懇願してとどめる。老母の様子を医者から聞かれて，階段から転倒して横たわったままだ，とジョニーは冷淡に答え，驚いた医者は鞄を抱えて出ていく。医者を追い払う口実だったとジョニーは言い，ビリーは両親についての医者の説明が正確かどうか，尋ねるが，犬猿の仲のジャックとパティが男同士で納屋でキスしていた，などと話題を変えてなかなか喋ろうとはしない。しかしお茶を持ってきたアイリーンと目配せして，両親はビリーの治療代100ポンドを捻出するために生命保険契約を結び，赤ん坊のビリーをジョニーに預けると，自らは石を詰めた麻袋を手に縛りつけて入水自殺した，と告げて立ち去る。早く教えてくれればよかったのに，とビリーはアイリーンに言い，二人は寄り添う。そこへヘレンが登場し，相変わらず乱暴な口調でビリーの怪我の具合を見る。ビリーは，島の自然も食べ物も知人も，いなくても惜しくはないが，ただ君がいないと寂しい，百万分の一の可能性でも賭けてみるのが人生だから，いつか一緒に散歩のデートをしてほしい，と思い切って告白する。ヘレンはゆっくりと鼻でせせら笑い，戸口でまた大笑いして出ていく。立ち聞きしていたケイトが姿を見せ，いつか外見でなく心を見てくれる女性が現れるよ，と慰めるが，ビリーは咳をしながら奥へ消える。閉店準備を手伝いにアイリーンも現れ，ヘレンよりも頭が悪く醜い娘に要求水準を下げるべきだけど，それじゃビリーは気に入らないだろうし，と悩む。アイリーンは，ビリーの両親の自殺に関するジョニーの例の作り話を聞き逃した，とケイトに教え，本当は，石の袋に縛りつけられていたのはビリー本人であって，もしジョニーが泳いで救出しなかったなら，いまでも海底に沈んだままだし，ビリーの治療費はジョニーが自分の母親の貯金100ポンドを拝借したもので，悲しむだろうが，いつかは真実を打ち明けねばならないわねえ，と相談し，店仕舞いを終え，ドアに鍵をかける。とにかくビリーが戻ってきて，ずっといてくれるんだから，これからはぐっすり眠れるわね，とお互いに言い交わし，腕を組んで奥に消える。しばらくして，目を泣きはらしたビリーが奥から現れ，壁に掛けた布袋に豆缶を押し込み，上部を縛って自分の両手に結びつける。ドアにノックがあり，袋を背後に隠して，ドアを開けると，ヘレンが顔をのぞかせる。誰にも見られない暗い場所でキスもお触りもなし，あるいは少しだけのキスとお触りなら，デートしてもいいよ，明

日は弟の誕生日で望遠鏡をプレゼントするから駄目だけど，明後日ならいいわ，と言って，ビリーの顔の包帯の傷をつついてからかったあと，さっとキスとウィンクを与えて去っていく。しばらく呆然としたあと，袋のことを思い出し，紐をほどいて缶詰を棚に戻し，袋を壁にかける。微笑んで奥へ跛をひいて歩きだすが，突如，激しく咳き込んで手を口にあてる。手には喀血のあとがあり，笑みは消え，明りを落として，彼は奥へと消える。溶暗。（9場）

生得の障害を持つ少年ビリーの自立への挑戦と挫折，そして再出発の希望を描いた作品で，とくに彼の出生時の秘密があらわになる酷薄な9場は哀切である。壁にかけてあった布袋は赤ん坊のビリーが縛りつけられていた布袋なのだろうか。ヘレンが訪ねてこなければ，彼は同じ布袋に我が身を結んで，そのまま海へと身を投げたのだろうか。ことによると，ケイトがお守りのように語りかける＜石＞もまた，その布袋に重しとして入れられていた一つ，いわば両親の遺品なのかもしれない。（ダン・オコナーの砦をはじめ，石だらけのイニシュマーン島では，石に神秘な力を感じるのは不思議ではない。）実の両親の手で殺されかけたビリーの苦悩の救済は，叔母代わりに彼を養育してきたケイト姉妹や，粗暴さの裏に純朴さを秘めたヘレンに寄せる彼の思慕の成就，ビリーの秘密だけは頑なに口を閉ざしてきたジョニーの潔癖さなどにみられる，島人の人情のぬくもりであろう。アラン島を舞台とする作品として，ほぼ1世紀前に書かれたシングの紀行記『アラン島』を下敷きとしているものと想像されるが，マクドナがアラン諸島を実際に訪れたことがあるかどうかは詳らかでない。シングが最初にアラン島を訪れたのは1899年の5月10日から24日のイニシュモア島で，翌年イニシュマーン島を訪ねたときにはパトリック・マクドナ（Patrick MacDonagh）という男の家に滞在し，この家の少年とアイルランド語で手紙のやりとりをしたことが『アラン島』第1部の最後に記されているが，この少年[20]の名前が，作家と同じマーティン・マクドナであったのも興味深い偶然の一致であろう。

III　マクドナ演劇の主題と特色

(1)　家族に向けられた憎悪と暴力——幼児期の怨恨への執着

『リーナン村のミス・コン女王』ではモリーンによる＜母親殺し＞が，『コネマラの頭蓋骨』ではミックによる＜妻殺し＞（の嫌疑）が，『孤独な西部』ではコウルマンによる＜父親殺し＞が，『イニシュマーンの跛』ではビリーの両親による＜子殺し（しかも嬰児殺し）未遂＞が描かれている。さらに『孤独な西部』での＜兄殺し未遂＞＜弟殺し未遂＞や，複数の作品での犬，猫，ハムスター，鷲鳥などの＜動物殺し＞の言及，

さらに『イニシュマーンの跛』のジョニーが老母に大量に酒を飲ませるのも，一種の安楽死幇助に近い＜母殺し＞と解釈すれば，マクドナの4作品は，あらゆる親族殺人や動物虐待を網羅した，壮絶で陰惨な殺人戯曲集の観すらある。動機の観点から見れば，モリーンは恋愛における母親の過干渉の積年の恨みと精神不安に，恋人の裏切りによる絶望が加わったもの，ビリーの両親の場合は，悲しいことだが障害児誕生と将来の養育への悲観，コウルマンの場合は，表面的には髪形をからかわれただけの，激情型の衝動殺人に見えるが，幼児期の心の傷に溯る根深い恨みがある。この幼児期における物神崇拝(フェティッシュ)的なこだわりは，コウルマンの壊されたミニ・カーへのこだわりや復讐心の他にも，『リーナン村のミス・コン女王』でレイが示すテニス・ボールへの異常な執着，『孤独な西部』のヴァレンの小立像収集熱，『イニシュマーンの跛』のバートリーのアメリカ製のお菓子や望遠鏡への固執などに顕著なように，彼らにとっては，特定のモノへの偏愛が挫折した時点で，完全な自己充足感を喪失し，いわば成長の時計が停止したままになっていると言えるのかもしれない。

(2) 言葉への鋭敏なこだわり

（i） ＜言い間違い＞の意図的使用

マクドナ作品には，固有名詞の度重なる言い間違いが登場する。モリーンがレイを＜パトウ＞と言い間違えるのは，その深層心理や著者の意図が明瞭に表されている例だが，もっとも頻繁で典型的にみられるのは，＜ウェルシュ神父＞の名を＜ウォルシュ神父＞と言い間違えることであり，これは神父が登場する『孤独な西部』においても，あるいは名前だけが言及される他の2作品においても，およそ4割の頻度(22/54例)で発生している[21]。「ウェールズ人」を表す普通名詞'Welsh'をアイルランド人に用いるよりは，ダブリンの大司教まで勤めたWilliam J. Walsh (1841-1921) の名が威厳があって聖職者にふさわしいと考える深層心理が働いたのだろうが，名前を正確に覚えていないことは人格まで尊重していない証拠だと，神父が不快感を表明した心情は理解できる。精神分析学者フロイトは『日常生活の精神病理学』第5章「言い違い」の章で，「他人の名前を歪曲して言うことは，それが意識的に行なわれる場合には，一種の侮辱であるが，無意識的な言い違いとして起こる場合にも多くは同じ意味を持っている[22]」とし，「治療してくれた医者の名前をよく言いちがえるのは貴族階級の人に多い。このことから，彼らは医者にたいしてふつうは慇懃な態度を取っているが，内心では低く評価していることが分かる」と，個人的感想を付記している。言い間違い，ならぬ名前の＜度忘れ＞に関しても，以下のような，別の学者の論文をフロイトは引用している。――「相手が自分の名前を度忘れしたことに気づくと，たいていの人は

気分を害する…われわれは，すぐに名前は人格の本質的な部分だと無分別に決めてしまい，…相手を侮辱するうえで，もっとも確かな方法は相手の名前を忘れてしまったかのように振舞うことである。つまり，そうすることによって，『あなたは私にとってどうでもよい存在なのだから，わざわざあなたの名前を覚える必要はありません』ということを表わしているのである。…名前を間違えるということは，名前を度忘れすることと同じ意味を持っている[23]」という結論を援用している。しかしながら筆者には，姓名の言い間違いは，かならずしも敬意や注意の欠如とは限らないように思える。テキストに即して言えば，神父に純愛を抱いているガーリーン（でさえも）が，愛する神父の名前を3度も言い直していることが，その傍証となるだろう。間違えることを神経質に考えれば，まず呼びかけ自体を躊躇するはずであり，逆に，繰り返し間違えて憚らないのはそれだけ親密な関係が成立していることの証しになるのではないか。もちろん，マクドナが，＜ウォルシュ神父＞の言い間違いを多用したのは，神父への村人の敬意や配慮の欠如を印象づけ，自殺にまで至る彼の疎外感を浮かび上がらせることを意図していたからに相違ないだろうが。

（ii） 語彙へのこだわり

同じ語や同じ表現の反復を執拗に利用したり，「アイルランドも捨てたもんじゃないね，○○[24]がアイルランドに足を運ぶとは」という一種の常套句を，話者を変えながらも異口同音に言わせる巧妙な技法を駆使したマクドナが，『孤独な西部』のミックに「同じ単語を繰り返したくない」(155)と言わせ，同義語を思いついたトマスに「俺は語彙が豊富なんだ」と自慢させているのは，処女作『リーナン村のミス・コン女王』に劇評家諸氏が寄せた反復語法の指摘に対する，マクドナなりの反駁，ないしはあてこすりかもしれない。劇中で登場人物たちがもらす語彙へのこだわりや誤用も散見され，‘bigness’という語へのジョニーの不満(14)，‘comparison’ (91)，‘evidently’ (101) の持つよそよそしさ，辞書にない‘unbare’ (175) という語彙への神父の揶揄，「貯水池」‘reservoir’を意味する特殊な個人語（イディオレクト）として‘russaway’ (199) の使用（ヴァレン）などが，その例である。

評論家フィンタン・オトゥール（Fintan O'Toole）の論評[25]のなかに，舞台となった西部地方がいわゆる＜ゲールタハト＞と呼ばれるアイルランド語使用地域であるのに，全登場人物が英語だけを喋り，ところどころ，間に合わせのようにアイルランド語の単語（たとえば‘boy’を意味する‘gasur’）を散りばめただけなのはおかしい，という批判がある。これは，『リーナン村のミス・コン女王』のアイルランド語版*Banríon Álainn an Líonáin*が出版された現在では批判の力を失っているだろうし，たとえアイルランド語版の刊行がなかったとしても，的はずれな批判だっただろう。ロンドン

を活動拠点とする英語作家が，英国の観客や読者を念頭に英語で芝居を書くのはきわめて当然の成り行きであり，オトゥールの批判は，フリールの『翻訳』において，アイルランド人登場人物の英語の台詞を，アイルランド語で話されていると観客が想定することを要求された不合理な事態，あるいは，ダグラス・ハイドがアイルランド語で書いた戯曲のグレゴリー夫人による＜英訳＞版においても，いくつかのアイルランド語語彙や表現が未消化で残されている不徹底さの問題と本質的には同じ問題を衝いているにすぎない。『リーナン村のミス・コン女王』の登場人物一同がアイルランド語で喋ればリアリティは確保されようが，未知の惑星言語にしか響かぬ芝居を一般の英国人観客が理解しようとするはずはなく，指摘された戯曲をマクドナが英語で書いたことは自然で正当な営みである。

(3) 閉鎖的共同体の批判

『リーナン村のミス・コン女王』のなかで一時帰郷したパトウが言うように，＜雌牛を蹴とばすと，のちのち20年も恨みを抱かれるような狭い田舎＞(31)が，マクドナ演劇の批判対象のひとつであることは間違いない。同じ作品のレイも，＜アイルランドを誰がテレビで見たがるもんか？見たけりゃ窓の外に目をやればいい，すぐに飽きちまうけど＞(76)と語り，ややもすると，のどかで平穏な牧歌的田園の肯定面ばかりを連想しがちな他国の人々に対して，過疎の農村生活の単調な閉塞感を吐露させている。極端に言えば揺篭から墓場まで，同じ顔見知りの隣人と生活をともにする小さな共同体では，日常の起居が細大漏らさず互いの共有情報となり，隠された秘密を求めて無用の詮索や風評が蔓延する。『リーナン村のミス・コン女王』のすれちがい悲劇の一因が，マグによって手紙文が握りつぶされ，モリーンの手元に渡らなかったことに起因するのは示唆的である。現代社会においても，一通の手紙や電子メイルが届かなかったり，あるいは読まれなかったりして，意思疎通や業務に大きな支障をきたすことは多々あるだろうが，一生を左右する手紙を弟に託し，再確認の電話（フォラン家にも設置されている設定）も再度の督促状も出さず，（モリーンの言葉が虚勢でないなら）直接話す機会がありながら真実を確かめることを怠ったパトウは，恋文を至高の告白手段とみなす古典的・情緒的発想の持ち主だったというよりは，率直かつ事務的に相手の意向を確かめることを避けるムラ型の精神構造が身についてしまった人物だったと言えないだろうか。遠回しに探りを入れる姑息な話しぶりは，『イニシュマーンの跛』のジョニーや『孤独な西部』のメアリーの挙動にも窺える。しかし，こうした閉鎖性はいくら嘆いても仕方のないことである。情報が氾濫する現代の都会と違って，リーナン三部作の登場人物たちの日常生活の関心事は，もっぱら村人の動向をめぐる噂話

に終始し，『イニシュマーンの跛』の舞台となった1930年代の大西洋の小島では，島で起きた出来事を伝えるテレビのローカル・ニュースも地元新聞もなく，まさに口コミによる伝達こそが情報交換の大きな手段だったことは，ジョニーの存在が雄弁に物語っている。彼のニュース提供がいつも三本というのが，フリールの『翻訳』のヒュー先生の三段論法を想起させるが，ヒュー先生のように三番目まで話が進まず立ち消えになる[26]ことはなく，その点ではジョニーは几帳面な，村のジャーナリスト役をきちんと果たしている。

(4) 歴史や政治への言及

マクドナ作品を通して受ける全般的な印象は，歴史や政治問題についての要素の稀薄さである。三神弘子氏はこれを「歴史も政治も超越した物語空間[27]」と端的に要約して表現したが，テキストの細部にはところどころで歴史や政治を意識した言及があるのを看過してはならないだろう。18歳で絞首刑となったUCDの医学生ケヴィン・バリー（Kevin Barry, 1902-20）やマイケル・コリンズ（Michael Collins, 1890-1922）への言及（40/71），ミックによる大飢饉の誇張された惨状説明，戯画的場面とはいえ「祖国再生のためには卵まみれの髪よりひどい犠牲者がいる」(71)と言ってヘレンが実行する＜アイルラン対イングランド遊び＞の一方的な弟いじめ，死体散乱現場を見たいという警官トムにミックが返す台詞――「それなら北へ行けばいい…私設馬券売場かどこかをうろついてみろ」(120)は，1992年2月5日にBelfastのOrmeau RoadにあるSeán Grahamの私設馬券売場で起きたロイヤリストによる5人のカトリック殺害事件を示唆するし，留置所でのレイの負傷が自傷行為か，当局の拷問によるのか曖昧なのは，＜バーミンガムの6人＞事件に典型的な冤罪も暗示される。聖職者による不祥事が相次いだ90年代のアイルランドの世相を反映して，神父たちの陰部露出の猥褻行為がヘレンの口から露骨に語られ(28)，同性愛的淫行と無縁というのが，神父に対するコウルマンの唯一の褒め言葉に用いられているのも痛烈な皮肉であろう。国外の事件では，母親と自らの両腕を失った少年の写真入り女性誌記事の言及（229）が，北アイルランド紛争と同じように泥沼化していたボスニア紛争の惨状を伝え，ごまかし写真じゃないか，というヴァレンの心ない台詞は，紛争当事者でない人々の冷淡な無関心を浮き彫りにする。断片的ではあるが，こうした言及を寄せ集めれば，マクドナもやはり歴史や政治の網の目から自由ではいられなかった，と言えるだろう。

IV 終りに——ジャンルの混淆

既述した評論家フィンタン・オトゥールが，戯曲集の序文として寄せた解説[28]のなかで指摘しているのは，マクドナ演劇に特有な多様なジャンルの混淆——具体的には＜シェイクスピアとソープ・オペラ，グラン・ギニョル（恐怖劇）と聖書，メロドラマとグリム兄弟＞である。『コネマラの頭蓋骨』2場は，誰しもシェイクスピアの『ハムレット』4幕の墓堀人夫の場面を連想するだろうが，オトゥールはさらに「安物の吸血鬼映画」の要素もこれに加味されていると評している。『孤独な西部』では，ソープ・オペラ，とりわけ，テキサスの石油大富豪を描いたアメリカCBSのソープ・オペラ的テレビドラマ『ダラス』(*Dallas*, 1978-91，全357話)の登場人物である長男ユーイング・ジュニア（J.R.）とボビー（Bobby）が，コウルマンとヴァレンの関係に酷似していること，あるいは聖書の創世記のカインとアベル兄弟との類似も，当然ながら指摘している。さらに『リーナン村のミス・コン女王』のマグは，アイルランドの田舎メロドラマの登場人物でもあり，グリム童話『白雪姫』の邪悪な継母でもある[29]，という。映画やポップ・カルチュアへの言及は言うまでもなく，マクドナ劇には実際，さまざまな要素が混在し，ごった煮と化している感があるが，筆者が最後に付け加えるとすれば，やはりマクドナのストーリー・テリングの妙技であろう。読み返すごとに，いくつもの巧妙な仕掛けが随所に施されているのが発見される。この拙論はその仕掛けのほんの一部を解読したにすぎない。

使用テキスト

Martin McDonagh, *The Cripple of Inishmaan* (New York: Vintage International, 1998)
——————, *The Beauty Queen of Leenane and Other Plays* (New York: Vintage International, 1998)
——————, *Plays: 1* (London: Methuen, 1999)
——————, *Banríon Álainn an Líonáin* (Conamara: Clo Iar-Chonnachta, 1999)

注

1）W.ラングランド（柴田忠作訳注）『農夫ピアースの夢』（東海大学出版会，1981/9年），p.615.

2）J.C.Wells, *Longman Pronunciation Dictionary* (1990) では，'McDonagh'の発音記号は［mək'dɑ nə ‖ -'da:nə］であり，カタカナ表記としては「マクドナ」か「マクダーナ」らしいが，ここでは前者で統一する。

3）『イギリス・アメリカ演劇事典』（新水社，1999年），p.314.

4）中央英米文学会編『読み解かれる異文化』（松柏社，1999年），p.414.（児嶋一男「アイルランド人の血に

受け継がれた傷」)

5）文学座公演（1999年10月7日～17日，新宿・紀伊國屋ホール）プログラム『夢の島イニシュマーン』，p.2.

6）http://www.phillynews.com/inquirer/99/Mar/05/weekend/CRIP05.htm

7）http://www.geocities.com/～curtainup/lonesomw.html

8）Patrick S. Dinneen (ed.), *An Irish-English Dictionary* (Dublin: Irish Texts Society, 1927/75) には，'líonan'の定義として'small flax', 'a shallow sea-bottom in which sea-weed grows', 'a kind of green moss growing on rocks from low-water mark to half-tide'がみえる。また，ダグラス・ハイドの1幕劇『結婚』(*The Marriage*) にはキルリーナン（Killeenan）という類似地名が登場する。筆者の調べた範囲では，日本語表記が「リネイン」(的場淳子)，「リーナイン」(三神弘子)，「リーナン」(児嶋一男)，「リーネン」(読売新聞，公明新聞，「シアターガイド」) と不統一で，どれがマクドナの意図した発音なのか不詳だが，筆者は前述のハイド劇の類推から，「リーナン」を暫定的に訳語に用いることにした。なお，このリーナン村には「リーナン文化センター」があり，20もの多品種の羊を誇るコネマラの地場産業の羊毛業の歴史や，けばだて（carding），紡ぎ（spinning），織り込み（weaving）の展示品があり，6－8月には毎日，羊毛剪定の実演が観光客に披露されるという。[*Frommer's 99 Ireland* (New York: Macmillan Travel, 1999) , p.418.] 挿入歌の『紡ぎ車』の歌詞は不詳だが，羊毛の村リーナンに相応しい内容なのだろうと推測される。

9）これを凌ぐ5本同時上演は，1925年にノエル・カワード（Noël Coward, 1899-1973），1975年にアラン・エイクボーン（Alan Ayckbourne, 1939-）の先例があるようだ。「ロンドンではカワードの作品が五つ――つまり，続演されていた『うずまき』『花粉熱』『落ちた天使たち』*Fallen Angels* (1925)『浮気』*Easy Virtues* (1925)，『踊って暮らせば』*On With the Dance* (1925) ――同時に舞台にかかるほどの人気であった」(倉橋健)『世界の演劇ヨーロッパ篇（現代の演劇4）』(三笠書房，1965年)，p.29.「West Endでは，一時Cowardの芝居が五つの劇場で同時に上演されるという前代未聞の事すら起こった」(臼井善隆)『20世紀イギリス文学研究必携』(中教出版，1985年)，p.246.；「同時に彼（＝エイクボーン）の5作品がロンドンで上演されるという人気ぶり」(出戸一幸)『イギリス・アメリカ演劇事典』(新水社，1999年)，p.59.

10）アイリッシュに多い「パット」に母音を添えた名前だろうが，'pato'には「ホモ」の意味もあり，「なにも起きなかった一夜」の象徴になるだろう。

11）Delia Murphy (1902-71) はバラッド歌手。*The Spinning Wheel*は1939年にHMVレーベルで録音された。[Fintan Vallely (ed.) , *The Companion to Irish Traditional Music* (Cork: Cork University Press, 1999) , p.253.]

12）'...alas alas on on the skull the skull the skull the skull in Connemara in spite of the tennis the labours abandoned left unfinished graver still abode of stones in a word I resume alas alas abandoned unfinished the skull the skull in Connemara in spite of the tennis the skull alas the stones Cunard...' Samuel Beckett, *Waiting for Godot* (London: Faber and Faber, 1956/81), pp.44-45.

13）現在では新聞などのメディアは公式には'itinerant'を，また自分たちは'traveller','travelling people'を呼称として用いる。ジョージ・グメルク（亀井好恵・高木晴美訳）『アイルランドの漂泊民』(現代書館，1993年)，p.22.［原著名：George Gmelch, *The Irish Tinkers*, 1985］なお，ドイツでは同様の人々を表すのに，HWAO (Häufig welchselnder Aufenthaltsort＝frequently changing residence)) という行政上の略称がある。

14）正しくはScalextrixか。縮尺不定（scale x）と電動（electric）の合成語。1957年に英国で発売。[『英和商品名辞典』(研究社，1990年）より]

15) 原題の'cripple'の日本語への訳出には困難がつきまとう。筆者が充てた＜跛＞や，＜片端＞＜ちんば＞は今日，今野(こんの)敏彦『蔑視語－ことばと差別』（明石書店，1988年）や高木正幸『差別用語の基礎知識'99』（土曜美術社出版販売，1999年）などの指摘を待つまでもなく，それ自体が明らかに差別用語と認識され，使用を控えるべきことばである。「差別語の使用が話題となった」と但書きを添えたうえで『イニシュマンの不具者』という（これも差別用語とされる）訳語を演劇専門事典で充てられた的場淳子先生が，別の一般的な入門書［『アイルランド文学小事典』（研究社，1999年），p.104］では『イニシュマーンの身体障害者』と表記されたのも，あるいは文学座公演時のタイトルが『夢の島イニシュマーン』と意訳された背景にも，そうした人権への配慮が窺える。実際にテキストのなかでは，いかに事実の客観的描写であるにしても，＜跛のビリー＞とは呼ばないでくれ，という台詞がすでに1場(13)でビリー本人の口から発せられており，障害者当人が拒絶の意思を表明しているのを観客・読者は知っているし，「どんなにおかしくても，他人の不幸を笑っちゃいけない」(89)というビリーの抗議の口調は断固としている。だが，下表に示すように，'cripple'という響きのある語はこの芝居を通して実に100回以上も発せられ，'Cripple Billy'という表現は頻度の差こそあれ，登場人物のすべてが用いている。(単に'Billy'を用いる場合の方が総数としては上回り，KateとEileenは一度も本人の面前では'Cripple Billy' を使っていない事実は特記しておく必要がある。）そうであればなおさら，この語に込められた侮蔑的意識という悪を生の形でえぐり出す作業が必要であり，それをあえて穏当な表現で糊塗することは，差別の解消につながらないと筆者は考える。原題がもともと差別語なのだから訳語も衝撃度の強い差別語に，という短絡的発想でなく，あるいは，侮蔑語とされる語に愛着さえ込めることが可能だという詭弁まがいの極論を排したうえで，なお筆者が上述の訳語を充てたのは，フリールの『翻訳』のマーヌス，映画『ライアンの娘』のマイケル，そしてマクドナの『孤独な西部』のマーティンなど，アイルランド作品で'cripple' を積極的に描くことがまれでないのは，それが表す象徴の多義性によるからであり，他の穏便な訳語では代用できないと判断するためである。

	Kate	Eileen	Billy	Johnny	Helen	Bartley	Bobby	Mammy	Doctor	TOTAL
'Cripple Billy'	8	9	2	11	15	18	8	5	1	77
'Billy (Claven)'	36	27(1)	2(1)	3	9	9	9	2	6(2)	105(4)

このほかにテキストには，普通名詞形'cripple(s)' 4回，過去分詞形'crippled' 8回，形容詞的用法cripple(-)boy/fella/girlが各7，8，1の16回――総計すると，crippleの派生形があわせて28回使用され，'Cripple Billy'と合算して105回に及ぶ。

16) この長い命名はおそらく，＜本人の洗礼名＞に＜父親の洗礼名＞＜父親の渾名＞を付加して識別するアラン島の風習によると思われる。J.M.Synge, *The Aran Islands* (Oxford:Oxford University Press, 1979), p.109.を参照。

17) フラハティ夫人の回想(72-74)と年譜(194-5)によれば，フラハティ監督は1931年に英国に招待されて『工業英国』を作り，その1年後の11月にマイケル・バルコンの依頼でアラン諸島を訪ねている。映画『アランの男』の公開は1934年のことであるから，実際にロケがアラン島で行われたのは1933年ではないかと推測される。フランシス・H・フラハティ（小川紳介訳）『ある映画作家の旅』（みすず書房，1994年）［原著名：Frances Hubbard Flaherty, *The Odyssey of A Film-maker: Robert Flaherty's Story,* 1984］

なお，戯曲の舞台となったイニシュマーン島については，中の島の地理的不利を分かりやすく解説し，「三つの島のなかで最もひなびた表情をたたえているのが，真んなかのイニシュマンで…砂浜もなく，いきなり武骨な石の世界が始まる」(pp.118-9)と，伊藤ユキ子著『紀行・アラン島のセーター』（晶文社，1993/4年）では活写され，シングの『アラン島』の一節を引用して，「イニッシュモアの若者の間に流行していたジャージー・ジャケツが，イニッシュマンの若者の間ではまだ，さほど流行していないという事

情がよくわかる」(p.108)と，とみたのり子著『海の男たちのセーター　英国伝統ニットの旅』(日本ヴォーグ社，1989年）でも，イニシュマーン島の辺鄙さが語られている。

18) オーストリア生れの哲学者ヴィットゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein, 1889-1951）ならば，1948年ごろコネマラに暮らしたことがある。

19) 1798年のユナイティッド・アイリッシュマンの蜂起に参加した＜いがぐり頭＞の若者を指す。歌詞の内容は，蜂起参加直前に司祭に懺悔に来た青年が，司祭に扮装した英軍大尉に逮捕され，断罪されるというもの。

20) シング(姉崎正見訳)『アラン島』(岩波書店，1937年)，pp.98-99；J.M.Synge, *The Aran Islands*, pp.71-72. ただし，本文中では少年は匿名で扱われており，この事実はDeclan Kiberd, 'Theater; The Austere Setting of Synge's Harvest', *The New York Times* (August 8, 1999)による。

21)

	正しくWelshと発音	言い間違えてWalshと発音	
		すぐに訂正(a-b-c)	訂正なし
Coleman	11	0	2
Valen	10	4 (2-2-0)	6
Girleen	2	3 (1-2-0)	0
Ray	1	1 (0-0-1)	0
Mag	1	2 (1-1-0)	0
Maureen	1	0	0
Mary	1	2 (1-1-0)	0
Mick	3	0	0
Thomas	1	0	0
Mairtin	1 *	2 (1-1-0)	0
TOTAL	32	14	8

訂正のパターン

a) 正誤正（Welsh-Walsh-Welsh）
b) 誤正（Walsh-Welsh）
c) 正誤（Welsh-Walsh）
c) は厳密には訂正でなく誤謬

* Welsh or Walshと並列する1例を除外

22)『フロイト著作集第四巻』(人文書院，1970/87年)，p.75.

23) 上掲書，p.76.

24) ○○の箇所には「アメリカ人」(ジョニー,14)，「フランス人」(ヘレン，21)，「有色人種」(ボビー，37)，「ドイツ人」(マミー，52)，「鱶」(ジョニー，78)，「跛」(バートリー，88)が入る。[括弧内は台詞の話者と引用頁数]

25) Martin McDonagh, *Plays: 1* (London: Methuen, 1999), p.xv.

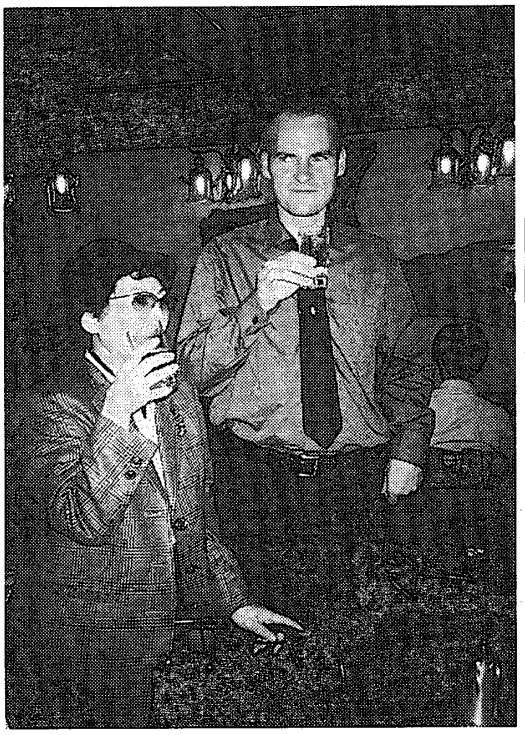
26) OWEN: ...he (＝Hugh) always promises three points and he never gets beyond A and B. [*Selected Plays of Brian Friel* (London:Faber and Faber, 1984/88), p.419.]

27) 三神弘子「沸騰する大鍋コールドロン」，『ユリイカ』(青土社，2000年2月)，p.220.

28) Martin McDonagh, *Plays: 1*, p.xvii.

29) S.ビルクホイザー-オエリ（氏原寛訳）『おとぎ話における母』(人文書院，1985/89年）の第4章「『白雪姫』の嫉妬深い継母」の記述から窺えるのは，継母と白雪姫の関係とマグとモリーンの関係の非照合である。継母と実母の相違はあまりにも大きいし，自らの美貌に関して鏡に問いかけるほどの虚栄心や嫉妬心はマグにはない。

[付記]『夢の島イニシュマーン』の日本公演の情報に関しては，文学座・演劇制作部の伊藤正道さんからプログラム，ポスター，台本，劇評などのご提供を受け，一方ならずお世話になりました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。



（打ち上げ会場にて。マーティン・マクドナ氏と出演者・本山可久子さん。写真提供：文学座）

（打ち上げ会場にて、スタッフ・キャストと。中央にマクドナ氏、その右に弟さん、その右に上演権日本代理店・ネイラー氏。写真提供：文学座）